

和歌山市内遺跡発掘調査概報

－ 平成18年度 －

川辺遺跡第2・3次確認調査

2008

和歌山市教育委員会

序 文

和歌山市は、紀伊山地を源に西流して紀伊水道に達する紀ノ川が形成した肥沃な和歌山平野の河口部に位置しています。

紀ノ川を中心として古代より文化の栄えた場所であり、全国的にも著名な太田・黒田遺跡や岩橋千塚古墳群をはじめとして、およそ 400ヶ所にもものぼる遺跡が確認されています。

それらの遺跡は、私達の祖先の残した貴重な文化遺産ですが、近年は遺跡内での開発行為が盛んになり、遺跡が壊滅の危機にさらされることも少なくありません。

そうした開発に対処するため、平成 7 年度から国庫補助金・県費補助金を得て、主に個人による開発を対象にした市内遺跡の発掘調査等の事業を実施してまいりました。

本書には、平成18年度に実施した発掘調査の成果を収めています。ここに報告する調査概要が活用され、地域の歴史解明に少しでも寄与できれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にあたりご指導・ご協力いただきました関係者各位及び土地所有者の皆様に深く感謝いたします。

平成20年 3 月31日

和歌山市教育委員会

教育長 大 江 嘉 幸

例 言

- 1 本書は、平成18年度国庫補助事業として計画し、財団法人和歌山市都市整備公社に事業の委託を行い実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。
- 2 調査対象経費の総額は3,375,932円であり、国1/2、県1/8、市3/8の補助率である。
- 3 本年度の調査対象は下記のとおりである。

事業名	調査地	調査期間	調査面積	調査担当
川辺遺跡第2次確認調査	和歌山市里・川辺・藤田 地内	平成18年8月15日～平成18年9月21日	175.5㎡	藤藪勝則
川辺遺跡第3次確認調査	和歌山市里・川辺・藤田 地内	平成18年11月14日～平成18年12月27日	132.8㎡	藤藪勝則
平成18年度出土遺物整理事業		平成19年3月1日～平成19年3月14日		奥村 薫

- 4 埋蔵文化財発掘調査及び報告書作成を行った担当者は以下の通りである。

埋蔵文化財発掘調査担当（平成18年度）

【和歌山市教育委員会】
学芸員 益田雅司

【財団法人和歌山市都市整備公社】
学芸員 藤藪勝則

報告書作成担当（平成19年度）

【和歌山市教育委員会】
学芸員 益田雅司

【財団法人和歌山市都市整備公社】
学芸員 藤藪勝則

- 5 本書のうち発掘調査の概要部分及び編集については調査担当者である藤藪勝則が担当し、また本書の構成については益田雅司が行った。
- 6 写真図版の遺物に付した数字番号は実測図番号に対応する。
- 7 出土遺物整理事業については、川辺遺跡第3次確認調査及び川辺遺跡第4次調査出土遺物のうち、未整理分の遺物コンテナ20箱分を対象として実施した。
- 8 本書の作成にあたり、関係機関等の方々に有益なご教示・ご指導を賜ったことに感謝の意を表します。

本文目次

1. 調査の契機と経過	1
2. 位置と環境	2
3. 調査の方法と経過	4
(1) 調査の方法	4
(2) 調査の概要	5
4. 遺構	6
(1) 第2次確認調査検出の遺構	6
(2) 第3次確認調査検出の遺構	10
5. 遺物	15
(1) 遺構出土土器	15
(2) 遺物包含層出土土器	16
6. まとめ	17
報告書抄録	20

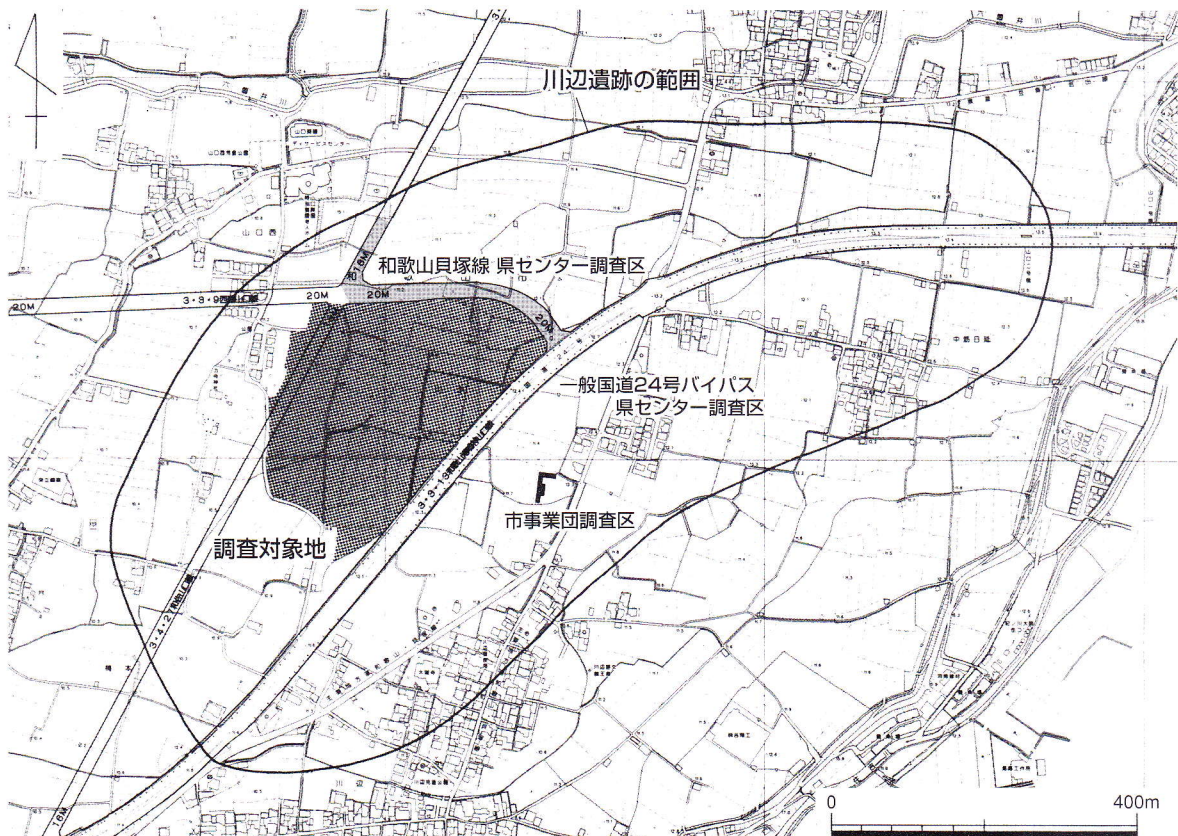
図版目次

- 図版1 第2次確認調査 調査前の状況(北東から)、第2次確認調査 調査前の状況(南西から)
- 図版2 第3次確認調査 調査前の状況(北東から)、1-1区全景(北から)
- 図版3 1-1区SK-3土層堆積状況(南から)、1-1区SD-3・4・5土層堆積状況(西から)
- 図版4 1-2区全景(北から)、1-13区全景(東から)
- 図版5 1-13区SD-2土層堆積状況(北から)、2-1区全景(北から)
- 図版6 2-3区全景(西から)、2-3区SD-1(北東から)
- 図版7 2-6区全景(南から)、2-7区全景(南から)
- 図版8 2-8区全景(北から)、2-8区全景(南から)
- 図版9 2-9区全景(北から)、2-9区SD-3土層堆積状況(北東から)
- 図版10 2-10区全景(北から)、2-11区全景(北から)
- 図版11 2-11区SD-4(東から)、2-12区全景(南から)
- 図版12 1-1区東壁土層堆積状況(西から)、1-2区東壁土層堆積状況(西から)
- 図版13 1-4区東壁土層堆積状況(西から)、1-7区北壁土層堆積状況(南から)
- 図版14 1-15区東壁土層堆積状況(西から)、2-5区北壁土層堆積状況(南から)
- 図版15 2-6区東壁土層堆積状況(西から)、2-8区東壁土層堆積状況(西から)
- 図版16 2-9区東壁土層堆積状況(西から)、2-11区東壁土層堆積状況(西から)
- 図版17 第2次確認調査SD-4・13出土土器
- 図版18 遺物包含層出土土器

1. 調査の契機と経過

和歌山市域の東端部にあたる川辺遺跡は、東西約1km、南北約650mの範囲をもち、縄文時代から中世にかけての大規模な集落遺跡である(第1図)。当遺跡における過去の調査には、昭和62・63年度及び平成3・4年度に財団法人和歌山県文化財センター(以下、「県センター」という。)が行った一般国道24号バイパス建設に伴う事前調査(調査面積30,641㎡)及び、平成9・12・13年度に行った県道和歌山貝塚線道路改良工事に伴う発掘調査(調査面積約7,400㎡)がある。また、平成13年度には財団法人和歌山市文化体育振興事業団(以下、「市事業団」という。)が遺跡の実態解明を目的とした発掘調査(調査面積192㎡)を実施している。県センターが実施したバイパス関連の調査では、縄文時代晩期の土器棺墓や弥生時代中期の方形周溝墓、古墳時代から飛鳥時代にかけての竪穴住居や掘立柱建物などを検出した他、遮光器土偶などを含む多量の遺物が出土している。貝塚線関連の調査では、弥生時代後期から古墳時代初頭の竪穴住居及び、古墳時代後期末から飛鳥時代の竪穴住居や掘立柱建物の他、中世の掘立柱建物や土坑墓などが検出されている。また市事業団の調査では弥生時代中期の松菊里式竪穴住居などが見つかった。

今回の調査は、和歌山市里、川辺、藤田地内において店舗建設に伴う大規模開発が計画され、この開発用地が『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』に記された川辺遺跡(遺跡番号145)の範囲内であったため、和歌山市教育委員会が国庫補助金を得て、遺跡確認の目的で実施することになった。調査は、和歌山市教育委員会の指導のもと財団法人和歌山市都市整備公社が委託を受けて行った。現地における調査は、第2次確認調査が平成18年8月15日から平成18年9月21日まで、第3次調査が平成18年11月14日から平成18年12月27日までの期間を要した。



第1図 調査対象地位置図

2. 位置と環境

和歌山市は、和歌山県の北西端部に位置し、北は和泉山脈を境に大阪府泉南郡岬町及び阪南市に、東は和歌山県岩出市及び紀の川市に、南は海南市に接し、西は紀伊水道に面している。奈良県の大台ヶ原に源を発する紀ノ川は、本市のほぼ中央を流れて紀伊水道に注いでおり、その沖積作用によって運ばれた土砂によって和歌山平野が形成されている。今回調査を行った川辺遺跡（1）は、紀ノ川河口から約12km上流の北岸に位置し、和泉山脈南麓と紀ノ川との間に形成された標高11～12mを測る沖積平野の微高地に立地する（第2図）。

周辺の遺跡を概観すると、川辺遺跡が立地する紀ノ川北岸には、縄文時代から江戸時代までの遺跡が多数立地しており、その中で縄文時代の遺跡としては川辺遺跡や高井遺跡（7）、六十谷遺跡（9）などがある。和泉山脈南麓の標高約12mを測る段丘上に立地する高井遺跡では、縄文時代のものと考えられるサヌカイ製の凹基式打製石鏃が出土しており、また、和泉山脈から南に派生する扇状地端部に立地する六十谷遺跡では縄文時代の土器が出土している。

次に弥生時代の遺跡については、前期段階の集落遺跡はきわめて少なく、六十谷遺跡で前期の土器や石器が採集されている他、川辺遺跡で前期の土坑が確認されているのみである。しかしながら中期以降、平野部の微高地上に本遺跡をはじめ、吉田遺跡（23）、山口遺跡（21）、宇田森遺跡（2）、北田井遺跡（3）、西田井遺跡（4）、田屋遺跡（5）などの集落遺跡が増加する傾向にある。そのうち、当遺跡の東約1kmにある吉田遺跡では、中期の方形周溝墓、中期から後期の竪穴住居や壺棺などが検出されている。後期の遺跡としては、北田井遺跡や西田井遺跡及び田屋遺跡においてベッド状遺構や貯蔵穴を伴う竪穴住居の他、掘立柱建物、溝、土坑墓や壺棺などが検出されている。また平野部の集落遺跡に対し、標高約90mの山腹に立地する橘谷Ⅰ～Ⅲ遺跡（15）は高地性集落であり、4条の空濠と竪穴住居が確認されている他、近接地から銅鐸が出土している。さらに、紀ノ川の中州（24）において突線紐式袈裟襷文銅鐸が出土している。

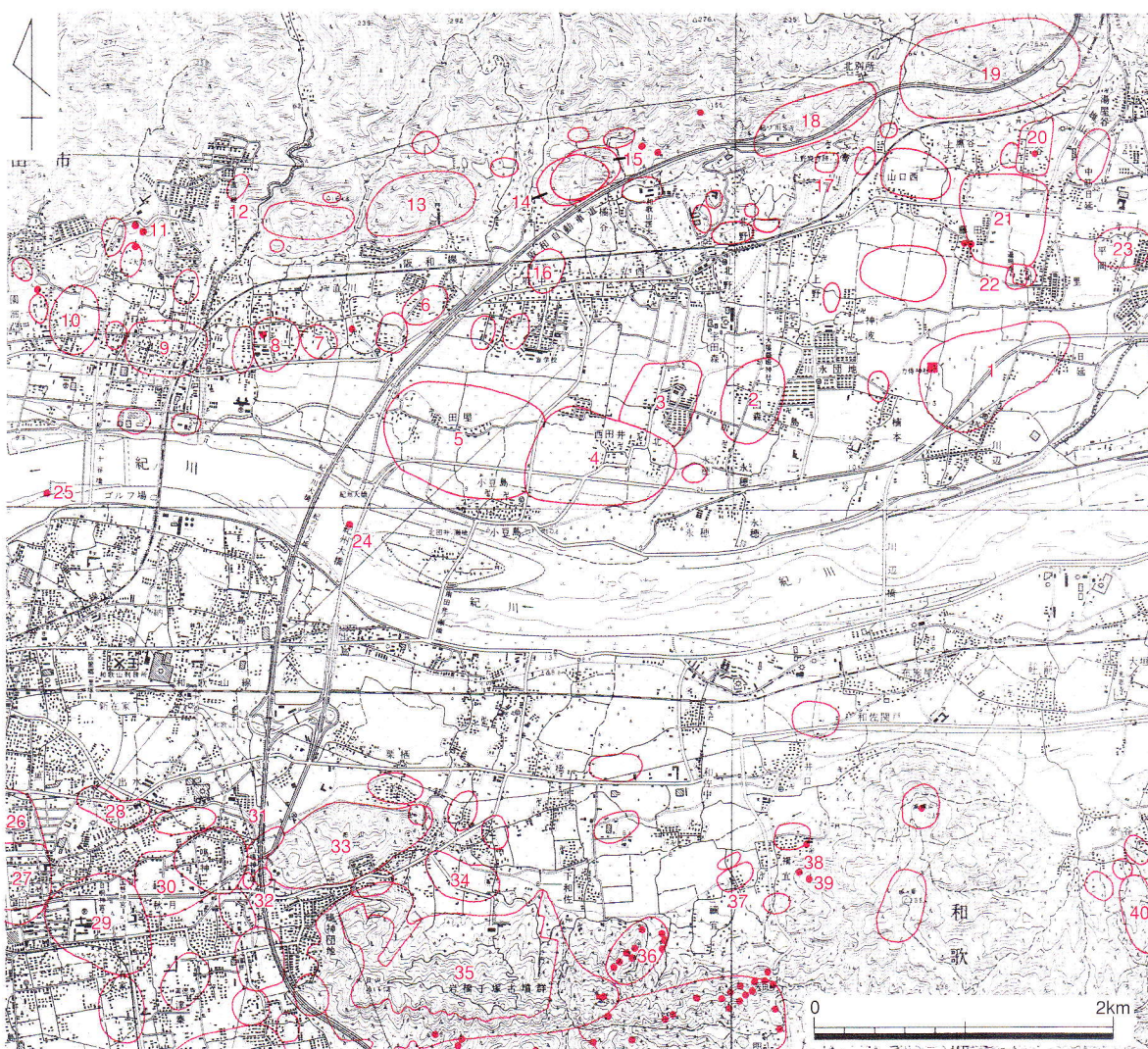
古墳時代の遺跡については、平野部の集落遺跡として吉田遺跡、北田井遺跡、西田井遺跡、田屋遺跡など弥生時代の集落域と重なるものが多く、集落が継続して営まれたことが分かる。その中で、吉田遺跡では古墳時代前期の一辺約7mを測る大型竪穴住居が検出されている。これらの他、府中Ⅳ遺跡（6）や高井遺跡のように、標高10～20mを測る段丘上に集落を形成するものもある。府中Ⅳ遺跡では、古墳時代前期の竪穴住居が7棟検出されており、その中で一辺8.6mを測る大型竪穴住居は吉田遺跡検出例も含め注目すべき遺構である。また高井遺跡では、古墳時代前期後半と中期後半の2棟の竪穴住居が検出されている。古墳の築造については、和泉山脈南麓の丘陵上に山口古墳群（19）、上野古墳群（18）、八王子山古墳群（14）、直川八幡山古墳群（13）、六十谷古墳群（12）などがある。六十谷古墳群は、古墳時代前期後半から中期前半にかけて営まれた古墳群である。また、八王子山古墳群は前方後円墳3基、円墳17基からなる古墳群である。このうち8号墳は直径35mの円墳で、鋸歯文鏡、鉄剣、鉄槍、鎌、琴柱形石製品、玉類などが出土しており5世紀前半の古墳である。また平野部では、北田井遺跡において人物埴輪などが樹立された埋没古墳が確認されている。

歴史時代以降の遺跡については、紀ノ川北岸を東西に推定されている南海道に沿って山口廃寺（20）、上野廃寺（17）、直川廃寺（8）などが建立されている。奈良時代に造営された上野廃寺は、

東西両塔を備えた薬師寺式の伽藍配置である。また府中遺跡（16）は、「府中」という地名が残るなど紀伊国府跡と推定されており、明確な遺構は確認されていないものの奈良時代や平安時代の菱形叩き目文を有する平瓦などが出土している。集落遺跡としては、山口遺跡において飛鳥時代の掘立柱建物がみられる他、吉田遺跡では奈良時代の掘立柱建物や竪穴住居、火葬墓が検出されており、また高井遺跡では平安時代の掘立柱建物が検出された他、緑釉陶器や灰釉陶器、圀脚円面硯が出土している。

鎌倉・室町時代では、高井遺跡において鎌倉時代の掘立柱建物や北宋銭15枚が副葬された土葬墓がみられ、平野部では西田井遺跡において、掘立柱建物群や井戸、池泉などが「コ」の字状の溝によって区画された室町時代の屋敷地が検出されている。

最後に江戸時代の遺跡としては、紀州徳川家の別邸である山口御殿跡（22）が知られている。



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	川辺遺跡	縄文～中世	9	六十谷遺跡	縄文・弥生	17	上野庵寺跡	白鳳～平安	25	有本銅鐸出土地	弥生
2	宇田森遺跡	弥生	10	有功遺跡	古墳～中世	18	上野古墳群	古墳	26	太田・黒田遺跡	弥生・江戸
3	北田井遺跡	弥生～古墳	11	大同寺墳墓	奈良～平安	19	山口古墳群	古墳	27	太田城跡	安土・桃山
4	西田井遺跡	弥生～中世	12	六十谷古墳群	古墳	20	山口庵寺跡	白鳳	28	太田城水攻め堤跡	戦国・江戸
5	田屋遺跡	弥生～古墳	13	直川八幡山古墳群	古墳	21	山口遺跡	弥生～中世	29	秋月遺跡	弥生・江戸
6	府中Ⅳ遺跡	弥生～中世	14	八王子山古墳群	古墳	22	山口御殿跡	江戸	30	鳴神Ⅴ遺跡	弥生～鎌倉
7	高井遺跡	縄文・鎌倉	15	橋谷Ⅰ～Ⅲ遺跡	弥生	23	吉田遺跡	弥生～奈良	31	音浦遺跡	古墳
8	直川庵寺跡	奈良～平安	16	府中遺跡	奈良～平安	24	紀ノ川銅鐸出土地	弥生	32	鳴神貝塚	縄文・弥生
									33	花山古墳群	古墳
									34	岩橋Ⅱ遺跡	古墳～室町
									35	岩橋千塚古墳群	古墳
									36	和佐古墳群	古墳
									37	欄干貝塚	縄文
									38	欄干Ⅰ号墳	古墳
									39	欄干Ⅱ号墳	古墳
									40	明楽古墳群	古墳

第2図 川辺遺跡周辺の遺跡分布図

(2) 調査の概要

調査地の基本層序については、調査地の北部及び北西部と東部及び南部とではその様相が大きく異なる。よって、土質・土色及び包含される遺物の時期や遺構検出面の対応関係を考慮し、大きく第1～7層に分層した(第4図、図版12～16)。

第1層は現代の耕作土であり、黄灰色系の粗砂混シルトである。調査地の北部及び北西部に位置する1-2・6～9・12～15区・2-1・4区周辺の第1層は、果樹園及び畑作地の耕作土でありそれ以外の調査区では水田耕作土となる。第2層は江戸時代の耕作土と考えられるものであり、灰黄色系の粗砂混シルトである。また第3層は室町時代から江戸時代にかけての耕作土と考えられるもので、にぶい黄色系の粗砂混シルトである。これらの第2・3層は、鉄分の沈着面によって2～3単位に細分が可能である。また主として調査地の北西部に設定した1-6～9・12～15区・2-4区では、これらの各層を確認することができなかった。遺構は、第2・3層上面において耕作に伴うと考えられる小溝を検出した。

次に第4層は、鎌倉時代の耕作土と考えられるものである。この第4層はにぶい黄色系の粗砂混シルトで、黒褐色の鉄分粒を多量に含むことを特徴とし、鉄分の沈着面によって2～4単位に細分が可能である。1-2・6～9・12～15区・2-1・4区では、包含される遺物の時期からこの第4層と対応するものとしてにぶい黄褐色系の粗砂混シルトが堆積している。この第4層上面では、1-5区・2-2・3・6・9・12区において耕作に伴うとみられる小溝を検出した。

第5層は奈良時代から平安時代にかけての耕作土と考えられるものである。この第5層は、調査地の東部及び南部に設定した1-3～5・10区・2-2・3・6～12区においてのみ確認できるもので、鉄分の沈着面によって4単位に細分が可能である。そのうち第5a・b層は平安時代の耕作土と考えられるもので、灰黄色系の粘土混シルトである。また第5c・d層は、黄褐色系の細砂混シルトであり、2-6～11区の調査地南部においてのみ確認できるもので、奈良時代から平安時代にかけての耕作土と考えられる。ただし、2-8区の第5c層はにぶい黄褐色の粗砂混シルトとなり、それ以外の調査区でみられる土色とは異なる。これらのうち第5a・b層については、水平に堆積する粘質土またはシルト質土であることから水田耕作土の可能性がある。遺構は、第5c層上面において平安時代のものとみられる溝及びピット、落ち込みを検出し、また第5d層上面では奈良時代から平安時代にかけてのものとみられる落ち込みを確認した。

第6層は、古墳時代以前に紀ノ川の沖積作用などによって堆積したと考えられるもので、褐色または黄褐色系のシルト質土であり2～4単位に細分が可能である。このうち、2-3・5・8区においてのみ確認した第6b'層はにぶい黄橙色系のシルト混粗砂であり、第6b層と第7層の混和層とみられるものである。また2-9区では、現地表下約1.3mに泥炭層と考えられる褐灰色の粗砂混シルト(第6d層)が堆積している。その他、第6a・b層が黄灰色の粘土またはシルトとなる1-10区・2-2区や、第6a層が灰黄褐色のシルトとなる2-11区については、調査区全体が遺構覆土内に設定されている可能性がある。また2-6区では、第6b層がにぶい黄橙色のシルトとなり、これについても遺構覆土の可能性が考えられる。遺構は、第6a層上面において古墳時代のものと考えられる溝や土坑の他、柱穴及びピット、また第5層が認められない2-1区では鎌倉時代の土坑などを検出した。

最後に第7層は、1～3cm大の円礫を多量に含む褐色系の砂礫層であり、1-7区では黄褐色系の粗砂及び礫が互層に堆積する状況を確認した(図版13の下)。この第7層は、1-2・11～15区・2-1・3・4・5・8区において確認したもので、調査地の北部から北西部にかけて堆積している。

また1-13区・2-3・5・8区では、第6層の下部にこの第7層が堆積する状況を確認した。これら第6・7層については、第6a・b層においてごく少量の遺物が含まれるものの、その他の第6層及び第7層では遺物を確認することができなかった。

4. 遺構

(1) 第2次確認調査検出の遺構

第2次確認調査では、第6層上面において古墳時代前期から後期末の溝や土坑の他、後期以降の土坑、また平安時代のもものとみられる溝を検出した。また第4層上面において中世の耕作に伴う小溝を検出した他、第2・3層上面において江戸時代の耕作に伴う小溝を検出した。

以下、遺構を検出した各調査区について説明する。

[1-1区] (第5図、図版2の下、3)

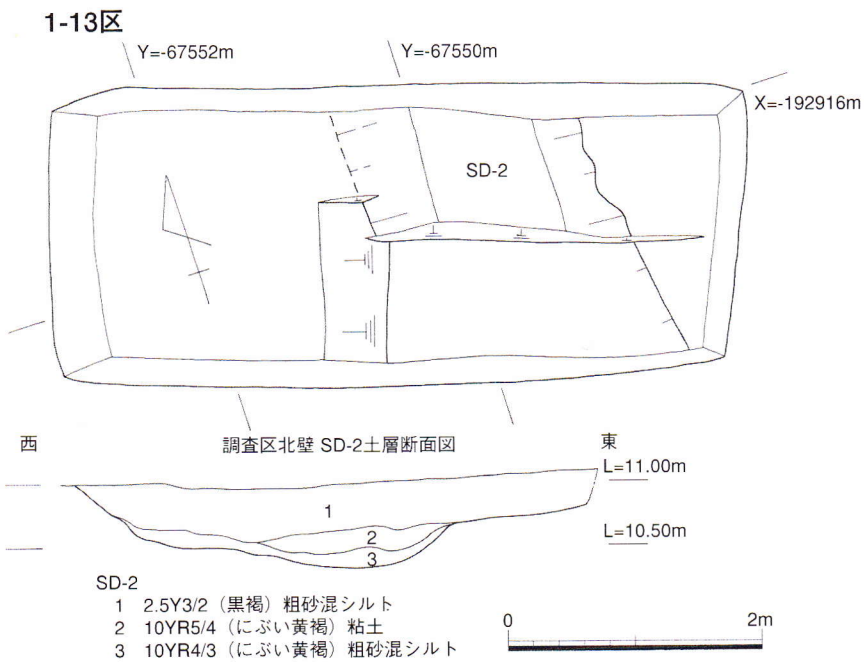
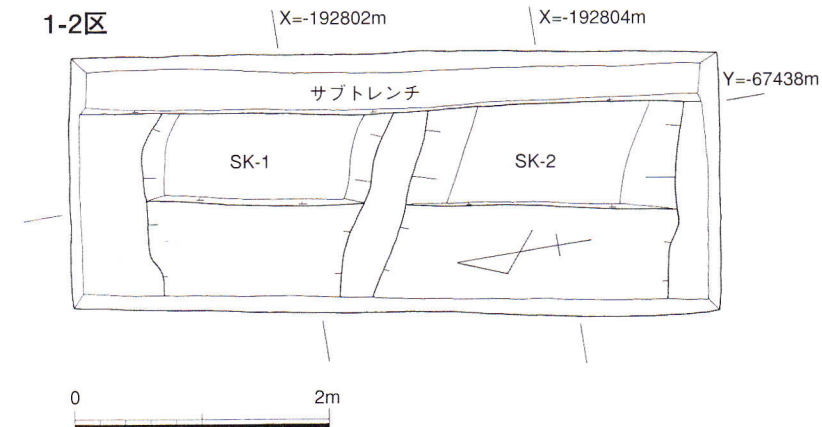
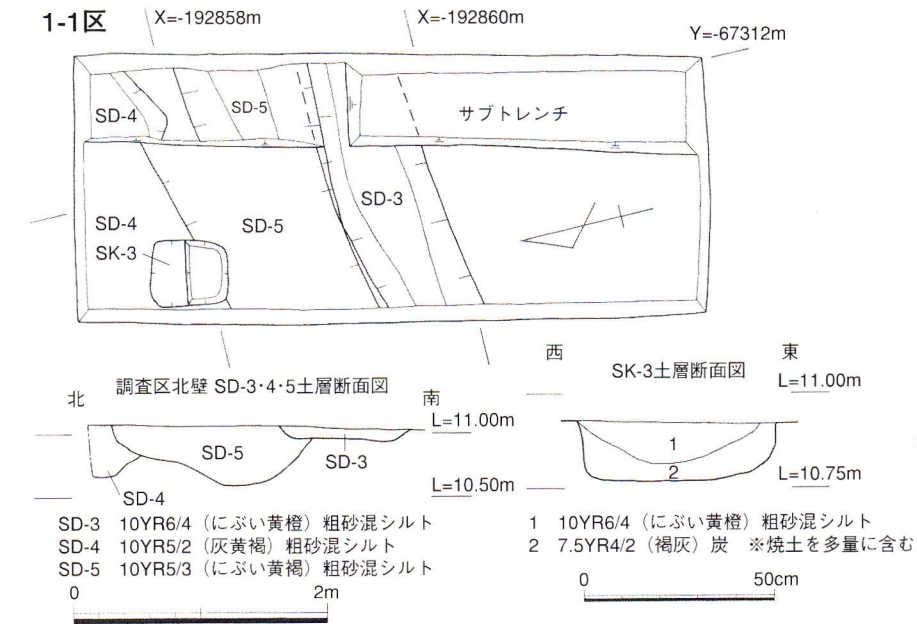
1-1区では、第6層上面において古墳時代前期の溝1条(SD-4)、後期の溝1条(SD-5)、後期以降の土坑1基(SK-3)、平安時代のもものとみられる溝1条(SD-3)を検出した。遺構検出面の標高は11.00m前後を測る。以下、主な遺構について説明する。

SD-4は、調査区の北端部において検出したもので、サブトレンチによる遺構掘削の結果、SD-5によって南側肩部を削平された溝と考えられるものである。この遺構覆土は、灰黄褐色の粗砂混シルトであり、深さは検出面から42cmを測る。SD-5は、調査区の北半部において検出したもので、サブトレンチによる遺構掘削の結果、SD-4が埋没した後にその南側に掘削された溝である。検出範囲は東西2.6m以上、幅1.1~1.3mを測り、ほぼ東西方向に掘削されている。遺構覆土については、単一でにぶい黄褐色の粗砂混シルトであり、深さは検出面から48cmを測る。SK-3は、SD-5が埋没した後に掘削された方形の土坑である。この土坑は、遺構検出時に炭及び焼土のラインが方形に巡ることから焼土坑と推察されたものであり、遺構覆土の状況を確認するために南半部のみ掘削を行った。その結果、規模は東西40~50cm、南北約60cm、深さは検出面から約15cmを測るもので、遺構覆土は2単位に分層が可能であり、第1層はにぶい黄橙色の粗砂混シルト、第2層は炭と焼土の混和層である。SD-3は調査区のほぼ中央部において検出したもので、SD-5が埋没した後にその南側に掘削された溝である。検出範囲は東西2.3m以上、幅約80cmを測り、ほぼ東西方向に沿って掘削されている。遺構覆土については、単一でにぶい黄橙色の粗砂混シルトであり、深さは検出面から14cmを測る。この溝の底面の標高は、東端部で10.95m、西端部で10.82mを測り、東から西に向かって13cmの比高差がある。

[1-2区] (第5図、図版4の上)

1-2区では、第6層上面において古墳時代後期末の土坑2基(SK-1・2)を検出した。遺構検出面の標高は11.20m前後を測る。

SK-1は調査区の北半部において検出したもので、その検出範囲は東西2.0m以上、幅1.4~1.9m、深さは検出面から17cmを測る。遺構覆土は単一で灰黄褐色の粗砂混シルトである。またSK-2は、SK-1の南側において検出したもので、検出範囲は東西2.0m以上、幅2.0~2.2m、深さは検出面から19cmを測る。遺構覆土は単一でにぶい黄褐色のシルト混粗砂である。これらの土坑については、東半部についてのみ掘削を行った。



第5図 1-1・2・13区 遺構全体平面図及び土層断面図

[1-13区] (第5図、図版4の下、5の上)

1-13区では、第6層上面において古墳時代後期末から飛鳥時代にかけての溝1条(SD-2)を検出した。遺構検出面の標高は11.10m前後を測る。

SD-2は調査区の東半部において検出したもので、北半部についてのみ掘削を行った。検出範囲は南北2.9m以上、東西3.8m以上、深さは検出面から66cmを測り、ほぼ南北方向に掘削されている。また遺構覆土は3単位に分層が可能であり、第1層は黒褐色の粗砂混シルト、第2層はにぶい黄褐色の粘土、第3層はにぶい黄褐色の粗砂混シルトである。出土遺物については、第1層から古墳時代後期末から飛鳥時代にかけての土器が多数出土した。これらの遺物は、この溝の埋没時期を示すものと考えられる。

(2) 第3次確認調査検出の遺構

第3次確認調査では、第6層上面において古墳時代のものとみられる溝及び土坑や柱穴の他、調査地の北部に位置する2-1区では鎌倉時代の不定形な土坑などを検出した。さらに第5c・d層上面において平安時代のものとみられる溝及びピット、落ち込みなどを検出した。また第4層上面において中世の耕作に伴う小溝を検出した他、第2・3層上面において江戸時代の耕作に伴う小溝を検出した。

以下、遺構を検出した各調査区について説明する。

[2-1区] (第6図、図版5の下)

2-1区では、第6層上面において鎌倉時代のものと考えられる不定形な土坑2基(SK-2・3)の他、ピット2基を検出した。遺構検出面の標高は、11.50m前後を測る。以下、主な遺構について説明する。

SK-2は、調査区の北半部において検出したもので、その規模は東西約1.1m、南北約90cm、深さは検出面から75cm以上を測る。遺構覆土は単一で暗灰黄色の粗砂である。この土坑の性格としては、柱穴とその抜き取り穴であると思われる。SK-3は、調査区の南半部において検出したもので、検出範囲は東西1.2m以上、南北2.1m以上、深さは検出面から30cmを測る。遺構覆土は単一で灰黄褐色のシルト混粗砂である。これらの土坑については、北半部についてのみ掘削を行った。

[2-3区] (第6図、図版6)

2-3区では、第6層上面において平安時代のものと考えられる溝1条(SD-1)を検出した。遺構検出面の標高は10.30m前後を測る。

SD-1は、調査区の東壁において西側肩部を検出したもので、北側部分についてのみ掘削を行った。その結果、検出範囲は東西2.0m以上、南北70cm以上、深さは検出面から20cmを測り、その主軸は北東から南西方向である。遺構覆土は単一でにぶい黄褐色の粗砂混シルトである。

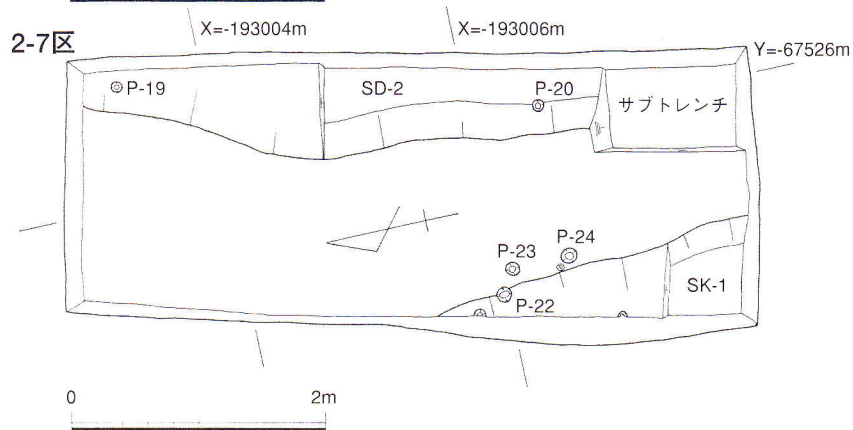
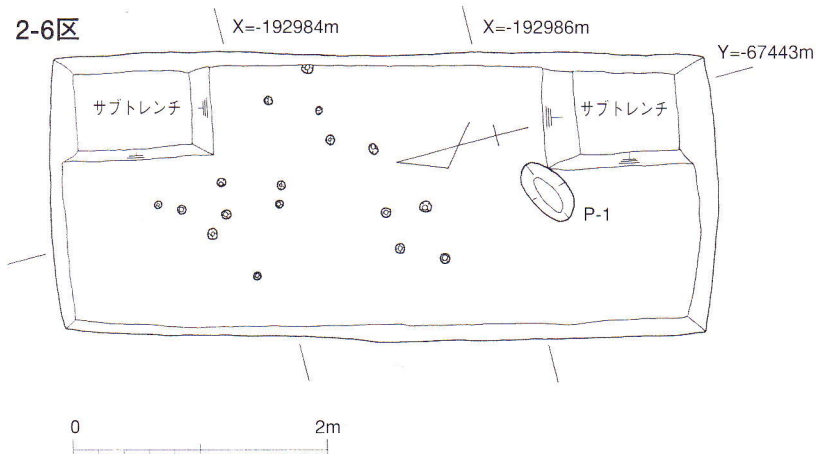
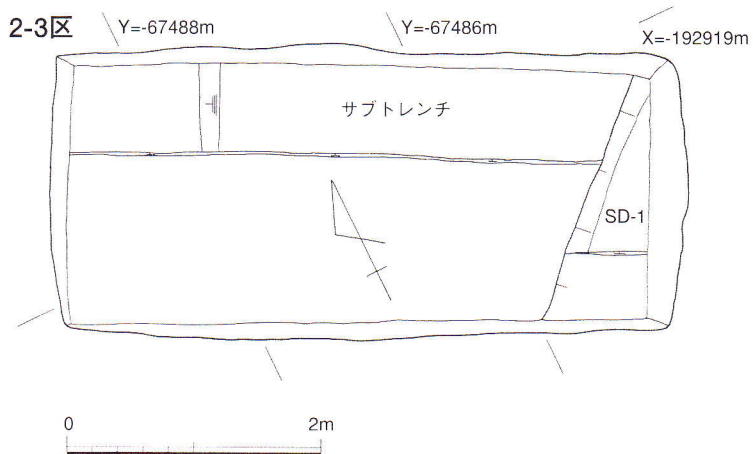
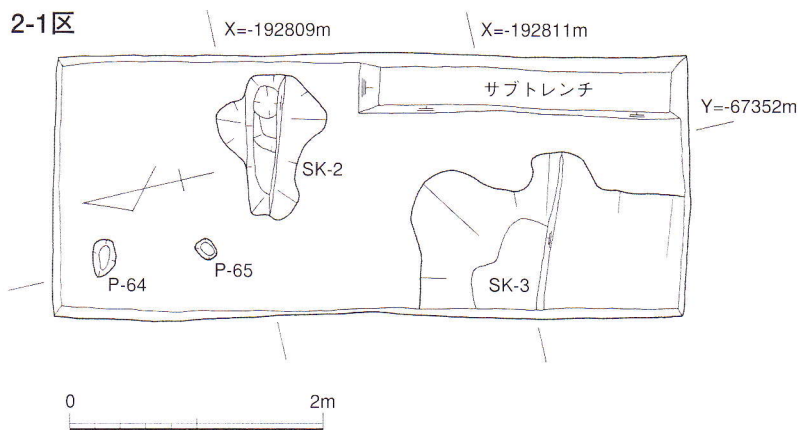
[2-6区] (第6図、図版7の上)

2-6区では、第6層上面において古墳時代のものと考えられるピット1基(P-1)の他、杭穴17基を検出した。遺構検出面の標高は、10.40m前後を測る。以下、主な遺構について説明する。

P-1は楕円形を呈するものであり、長径52cm、短径30cmを測る。遺構覆土は単一で灰黄褐色の粗砂混シルトである。

[2-7区] (第6図、図版7の下)

2-7区では、第6層上面において古墳時代のものと考えられる溝1条(SD-2)及び土坑1基(SK-1)の他、杭穴8基を検出した。遺構検出面の標高は、10.00m前後を測る。以下、主な遺構



第6図 2-1・3・6・7区 遺構全体平面図

について説明する。

S D-2 は、調査区の東壁際において西側肩部を検出したもので、南半部についてのみ掘削を行った。その結果、検出範囲は南北4.0m以上、東西70cm以上、深さは検出面から22cmを測り、その主軸はほぼ南北方向である。遺構覆土は単一でにぶい黄褐色の細砂混シルトである。またS K-1 は、調査区の南西隅部において東側肩部を検出したもので、南半部についてのみ掘削を行った。その結果、検出範囲は南北2.6m以上、東西70cm以上、深さ20cmを測る。遺構覆土は単一でにぶい黄褐色の細砂混シルトであり、黒褐色の鉄分粒を多量に含むものである。

〔2-8区〕（第7図、図版8）

2-8区では、第6層上面において古墳時代のものとみられるピット10基の他、杭穴8基を検出した。また、調査区の北及び東壁面の観察において、第5c層上面から掘削された平安時代のピット及び浅い落ち込みを確認した。遺構検出面の標高は、第6層上面が10.00m前後、第5c層上面が10.20m前後を測る。以下、主な遺構について説明する。

今回の調査で検出したピット10基のうち、柱痕を確認したことから古墳時代の掘立柱建物を構成する柱穴と判断できるものにはP-47・48・50・52・63がある。また遺構の重複関係から柱痕が確認できないものの、柱穴の可能性が考えられるものとしてはP-49・53・62がある。今回検出した柱穴については、検出面から若干掘り下げを行い、柱痕を確認後約1/2を掘削した。

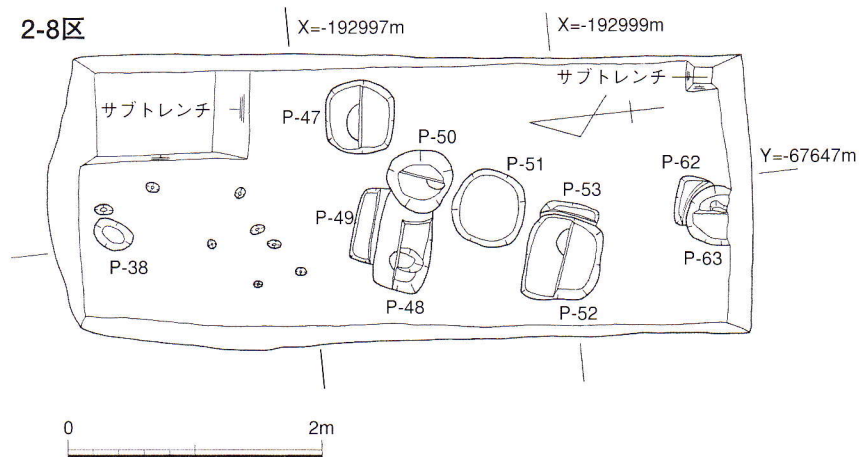
P-47は、調査区東壁際において検出したもので、南半部についてのみ掘削を行った。その結果、このピットは一辺52cm、深さ5cmを測るもので、平面形は隅丸方形を呈する。また土層堆積状況の観察から、中央部やや西寄りに柱痕を確認した。遺構覆土は、にぶい黄褐色の細砂混シルトであり、柱痕部分がにぶい黄褐色の粗砂混シルトである。P-48は、調査区のほぼ中央部において検出したもので、東端部はP-50によって削平されている。規模は、南半部についてのみ掘削を行った結果、東西75cm以上、南北42cm、深さ30cmを測るもので、平面形は長方形を呈する。また土層堆積状況の観察から、西端部において柱痕を確認した。遺構覆土は、灰黄褐色のシルトであり、柱痕部分は上層がにぶい黄褐色の粗砂混シルト、下層が灰黄褐色の粗砂混シルトである。P-52は調査区南半部の西壁際において検出したもので、南半部について掘削を行った。その結果、規模は東西60～70cm、南北60cm、深さ26cmを測るもので、平面形は隅丸方形を呈する。また土層堆積状況の観察から、東端部において柱痕を確認した。遺構覆土は、にぶい黄褐色の細砂混シルトであり、柱痕部分が灰黄褐色のシルトである。

〔2-9区〕（第7図、図版9）

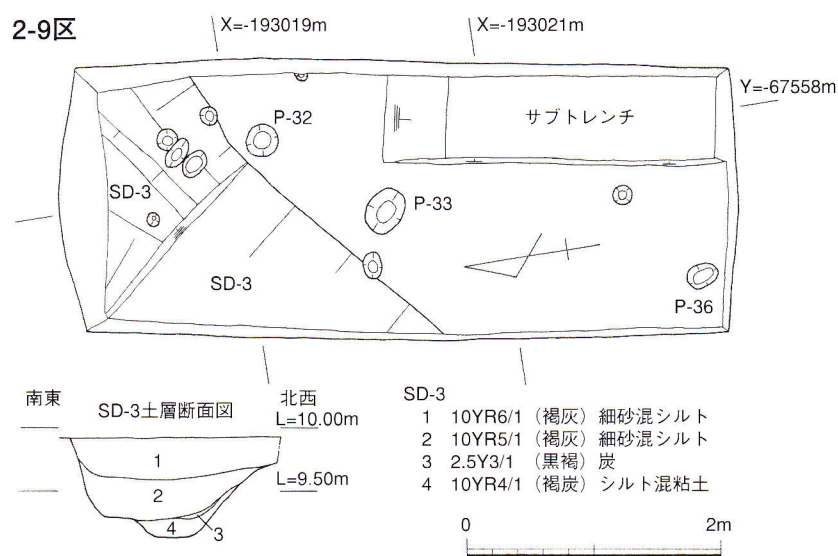
2-9区では、第5c層上面において平安時代のものと考えられる溝1条（S D-3）及びピット9基の他、杭穴2基を検出した。また調査区の東壁面の観察において、第5d層上面から掘削された奈良時代から平安時代にかけてのものとみられる落ち込みを確認した。遺構検出面の標高は、第5c層上面が10.00m前後、第5d層上面が9.90mを測る。以下、主な遺構について説明する。

S D-3 は、調査区の北端部において南側肩部を検出したもので、東半部について掘削を行った。その結果、検出範囲は東西2.9m以上、南北1.6m以上、深さ90cmを測り、その主軸は北東から南西方向である。この溝は南側斜面が2段に落ち込む断面形状であり、その平坦面においてピット3基を検出した。遺構覆土は3単位に分層が可能であり、第3層は薄く堆積した炭層である。

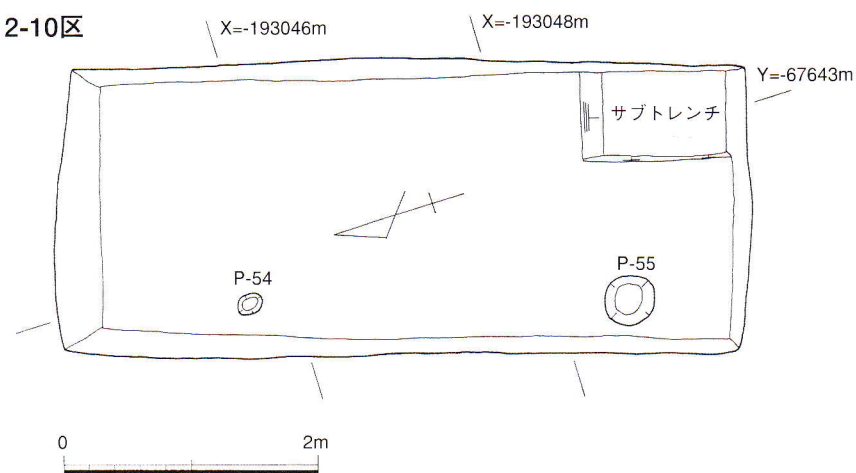
2-8区



2-9区



2-10区



第7図 2-8・9・10区 遺構全体平面図及び土層断面図

[2-10区] (第7図、図版10の上)

2-10区では第6層上面において、古墳時代のもものとみられるピット2基(P-54・55)を検出した。遺構検出面の標高は9.50m前後を測る。

[2-11区] (第8図、図版10の下、11の上)

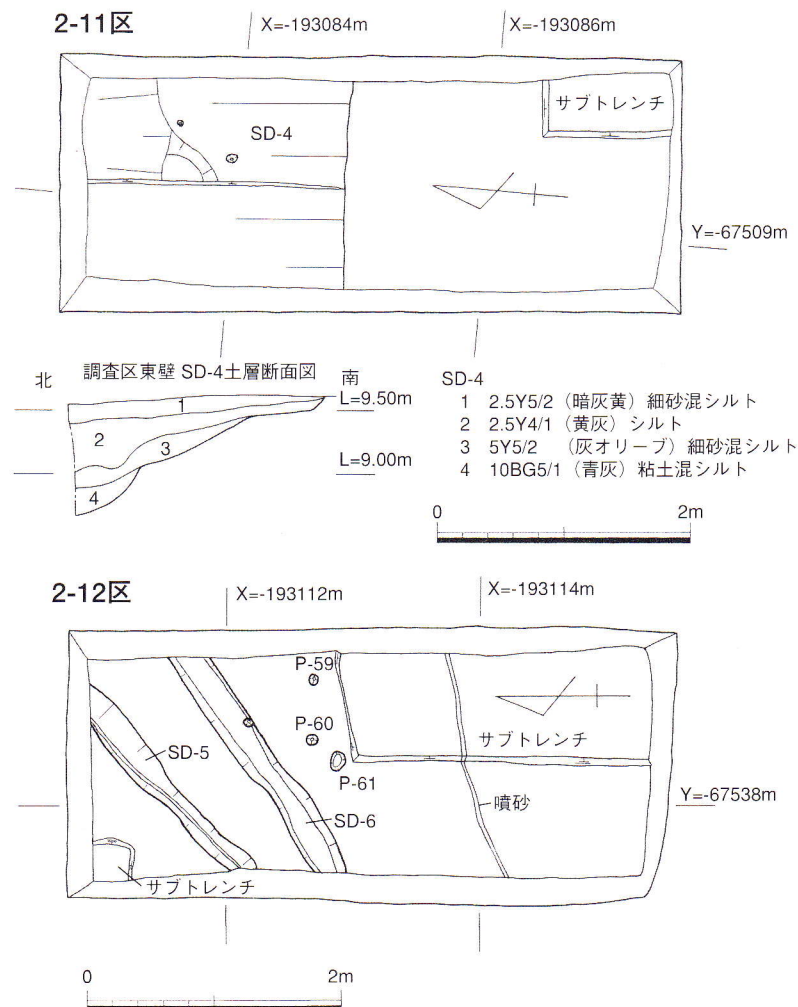
2-11区では第6層上面において、古墳時代のもと考えられる溝1条(SD-4)の他、杭穴2基を検出した。遺構検出面の標高は、9.60m前後を測る。以下、主な遺構について説明する。

SD-4は、調査区の北半部において南側肩部を検出したもので、東半部について掘削を行った。その結果、検出範囲は東西1.6m以上、南北2.0m以上、深さ90cm以上を測り、その主軸はほぼ東西方向である。遺構覆土は4単位に分層が可能である。

[2-12区] (第8図、図版11の下)

2-12区では第6層上面において、古墳時代のもと考えられる溝2条(SD-5・6)の他、杭穴4基を検出した。また調査区の南半部において噴砂に伴う砂脈を検出した。遺構検出面の標高は9.80m前後を測る。以下、主な遺構について説明する。

SD-6は、調査区の北半部において検出したもので、検出長2.2m、深さ4~8cmを測り、その主軸は北東から南西方向である。遺構覆土は単一で、にぶい黄橙色の細砂混シルトである。またこのSD-6



第8図 2-11・12区 遺構全体平面図及び土層断面図

の北側において約50cmの間隔で平行するSD-5を検出した。

その他、噴砂に伴う砂脈は、調査区の南部をほぼ東西に延びるもので、第6層を貫き上位の第5層では確認できないことから、平安時代以前に起こった地震に伴うものと考えられる。

5. 遺物

第2・3次確認調査で出土した遺物には、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、中世須恵器、中世土師器、中世陶器、輸入磁器、近世土師器、近世瀬戸・美濃系陶磁器、肥前系陶磁器、瓦、土製品、石器、金属器などがある。これらの遺物は、各調査区の遺物包含層や遺構覆土から出土したもので、その出土総量は第2次確認調査が遺物収納コンテナに3箱、第3次確認調査が2箱を数えるものである。特筆すべきものとして、中国製の青白磁合子(図版18の下a)などがある。

ここでは、まず第2次確認調査における遺構出土の一括遺物について述べ、包含層出土遺物については第2・3次確認調査出土遺物をまとめて説明する。

(1) 遺構出土土器

[第2次確認調査 SD-4 出土土器] (第9図1～3、図版17の上)

1～3はすべて土師器である。

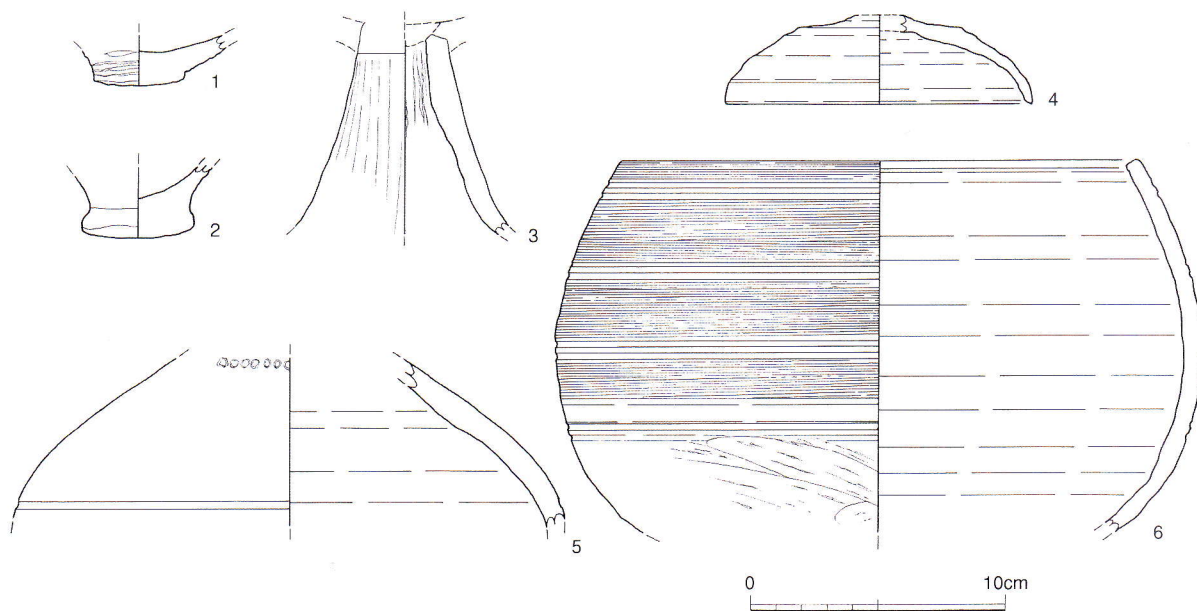
1・2は、底部平底の甕または鉢と考えられるものである。1は底径3.5cmを測るもので、内外面の調整は全体的に摩滅しているため不明瞭ではあるものの、外面には底部下端から体部にかけて成形時の平行タタキがみとめられる。色調は淡褐色から黄灰色であり、約1/2の範囲に黒斑がみられる。また胎土には細かな赤色軟質粒が含まれている。2は底径4.4cmを測るもので、内外面の調整は摩滅している。色調は褐色であり、胎土には1～8mm大の結晶片岩及び赤色軟質粒が含まれている。3は、高杯の脚部である。この資料は、脚部から杯部への接合部において破損し、その接合状況が比較的良好に分かるものである。色調は明褐色であり、胎土には1～3mm大の赤色軟質粒が含まれている。

これらの時期については、古墳時代前期のものと考えられる。

[第2次確認調査 SD-13 出土土器] (第9図4～6、図版17の下)

4～6はすべて須恵器である。

4は杯蓋であり、口径12.0cm、器高3.5cmを測る。形態的な特徴としては、体部から口縁部への屈曲が明瞭ではなく、口縁端部に面をもつものである。内外面の調整は、摩滅によって不明瞭ではあるもののヨコナデが施されており、天井部付近にはヘラ切りの痕跡が明瞭に残存している。色調は乳白色であり、還元不良のため軟質焼成である。5は壺の肩部から頸部にかけてのもので、肩部と体部との境には沈線がめぐり、肩部と頸部との境にはヘラ状工具によるとみられる線描きの円形文が横一列にみとめられる。色調は明灰色であり、還元は良好で堅く焼成されている。6は鉢であり、口径20.4cm、残存高14.6cmを測る。全体の形状は、いわゆる鉄鉢型といわれるもので、口縁部から体部にかけて緩やかに丸味を帯び、底部は尖底かもしくは丸底になるものと思われる。さらに、口縁部から体部下半にかけては2条一単位とする沈線が4単位施されている。外面の調整は、口縁端部から体部下半にかけてカキメが施されており、体部下半には斜め方向のヘラ削りがみられる。また、体部ヘラ削りとカキメとの境界部分には最終的に横方向のナデが



第9図 遺物実測図1

施されている。色調は明灰色であり、還元は良好で堅く焼成されている。これらの時期については、古墳時代後期末から飛鳥時代にかけてのものと考えられる。

(2) 遺物包含層出土土器 (第10図7～14、図版18)

[土師器]

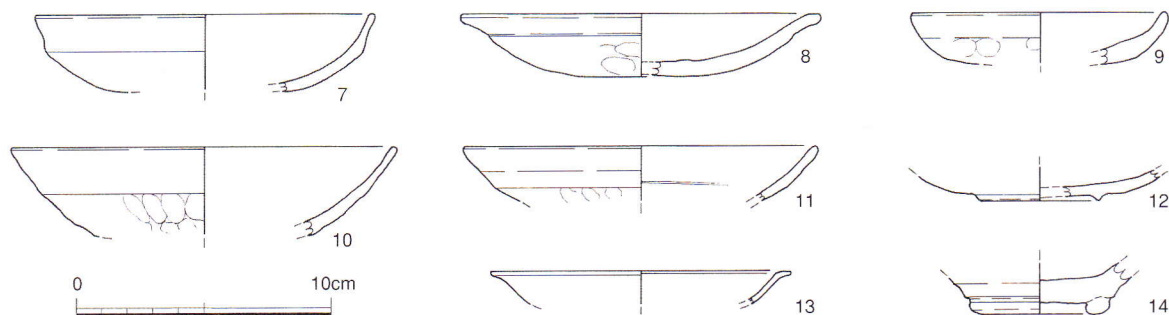
7～9は土師器皿である。7は、口径13.2cm、残存高3.0cmを測るものである。内外面の調整は器面全体が摩滅しており不明瞭ではあるものの、口縁部には強い横方向のナデが施されている。色調は明褐色である。胎土には1～5mm大の赤色軟質粒が含まれる。8は口縁部が外反する形態のもので、口径14.2cm、器高2.4cmを測る。内外面の調整は、体部外面に指オサエがみられる他、口縁部付近には強い横方向のナデが施されている。また内面の調整にはナデが施されている。色調は黒灰色から乳褐色である。これらの時期については、平安時代のもと考えられる。9は、口径10.0cm、残存高2.0cmを測るものである。色調は淡黄褐色であり、胎土には細かな赤色軟質粒が含まれる。時期については、鎌倉時代のもと考えられる。

以上の遺物の出土位置は、7が2-12区第5層、8が2-8区の北壁面において確認したP-66、9が2-12区第3層である。

[瓦器]

10～12は瓦器碗である。10は、口径15.0cm、残存高3.4cmを測るものである。外面の調整は、口縁部周辺に横方向のナデが施されており、体部下半には成形段階の指オサエがみとめられる。内面の調整は摩滅のため不明である。11は、口径14.0cm、残存高2.2cmを測るものである。外面の調整は、10と同様である。また内面の調整にはナデを施した後、粗いヘラミガキが施されている。12は、高台径6.1cm、残存高1.2cmを測るものである。高台は断面三角形のもので、低く貼り付けられている。内外面の調整は摩滅のため不明である。これらの時期については、鎌倉時代のもと考えられる。

以上の遺物の出土位置は、10が2-10区第4層、11が1-8区第3層、12が1-10区第4層である。



第10図 遺物実測図2

〔輸入磁器〕

13は、中国製の白磁皿であり、口径11.8cm、残存高1.3cmを測る。釉厚は薄く、内外面には貫入がみとめられる。時期については、平安時代のもと考えられる。この遺物は、1－10区第4層から出土した。

〔国産陶器〕

14は、瀬戸・美濃系灰釉碗の底部であり、高台径5.4cm、残存高2.0cmを測る。内外面の調整は、高台内底面に糸切りの痕跡が残存しており、外面の高台脇から体部下半にはへら削りが施されている。また内面には淡緑色の灰釉が全面に施釉されている。時期については室町時代のもと考えられる。この遺物は、2－11区第3層から出土した。

6. まとめ

ここでは、今回の調査結果からみた調査対象地周辺の微地形について述べてまとめとする。

調査対象地における現地表面の標高は、整地土を除いた現代耕作土（第1層）上面において計測すると、南北方向では調査地北端部の2－1区周辺が11.70m前後を測り最も高く、調査地南西端部に位置する2－10区周辺が10.50m前後を測り最も低くその比高差は約1.2mを測る。また東西方向の様相として、調査地の北端部では1－2区・2－1区周辺はほぼ平坦であるのに対し、2－1区から1－1区にかけては比高差約30cmで次第に低くなる。調査対象地の中央部では、1－7区から1－9区周辺の標高が11.35m前後を測り最も高く、1－7区より東側では1－3区にかけて比高差約30cmで次第に低くなるものの、1－3区から1－1区にかけては比高差約20cmで再び高くなる傾向を示す。

また1－15区から2－6区にかけても同様であり、1－13区から1－15区周辺の標高が11.45m前後を測り最も高所にあたるのに対し、1－10・11区周辺が比高差約70cmで最も低く、1－10区から2－6区にかけては標高11.10m前後と再び高くなる。ただし、最も低地にあたる調査地南部の2－8区から2－11区周辺については、現地表面の標高が10.60～10.80mを測り、東から西にかけてやや傾斜をもつ状況である。

調査の結果、上述した現地表面の高低差は、古墳時代から平安時代にかけての遺構を検出した各遺構検出面の高低差とも基本的に対応するものである（第4図参照）。したがって、現地表面の高低差は調査地周辺における古代の微地形を示すものと考えられる。また、調査地の基本層序について述べた調査地北部及び北西部に堆積する砂礫層（第7層）と、東部及び南部に堆積するシルト質土（第6a～6e層）

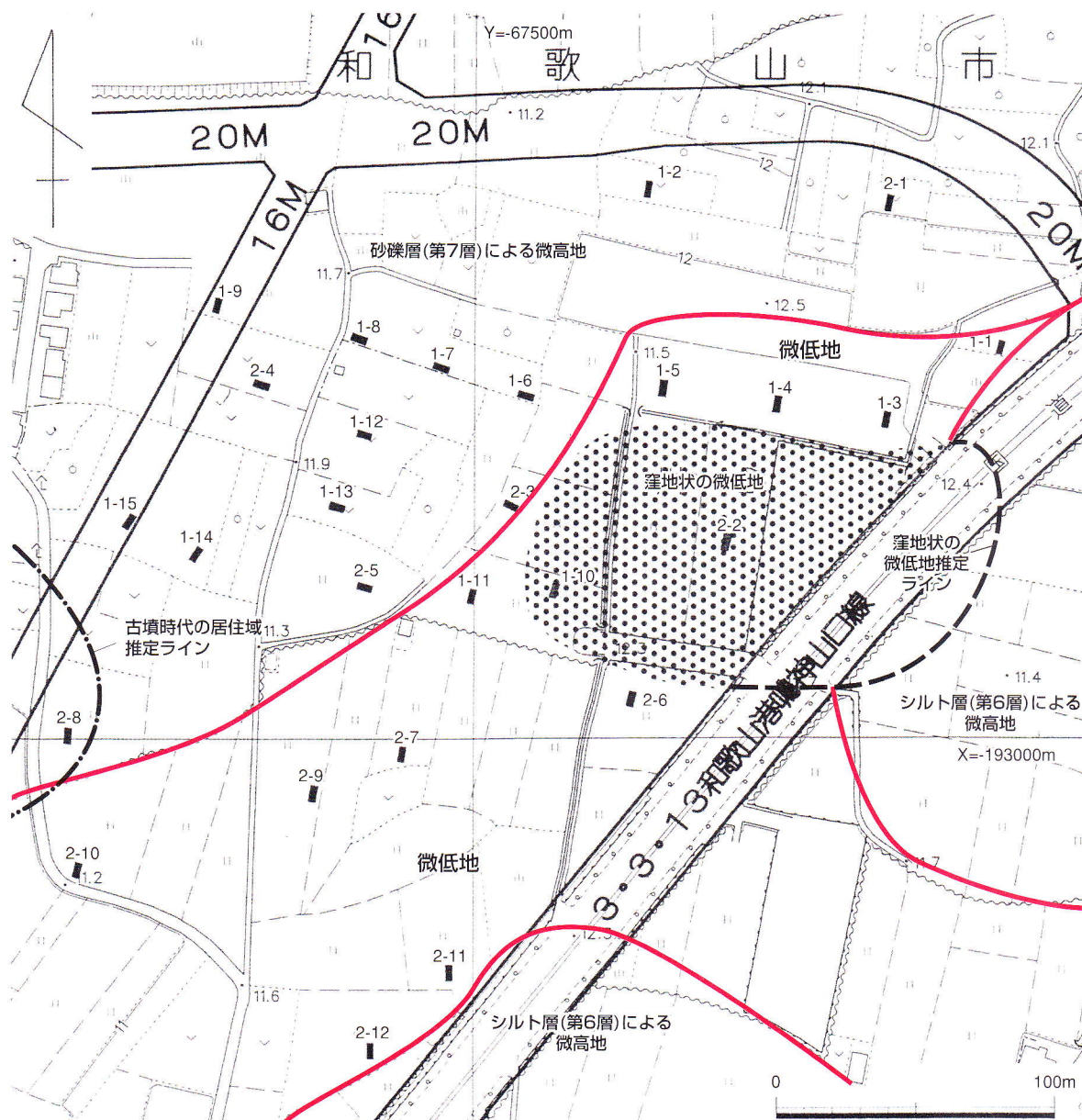
との堆積順序については、2-3・5・8区において設定したサブトレンチによる土層堆積状況の観察から、砂礫層の上位にシルト質土が堆積することを確認した。よって、調査地周辺ではこの砂礫層の堆積時期が最も古く位置付けられる。

以上のことを踏まえた上で、各調査区における土層堆積状況から微地形の形成過程について考えてみることにする（第11図）。まず調査地の北西部及び北部には、砂礫層が堆積し微高地が形成されていたものと考えられる。その範囲は、砂礫層を確認することができなかった1-1・5・10・11区・2-7・9・10区を結んだラインより北西及び西側とすることができる。そしてその後、この砂礫層の上部に紀ノ川又はその支流の沖積作用によって、調査地東部よりシルト質土が順次堆積していったものと考えられる。また、砂礫層で形成された微高地とシルト質土との境界部分（1-3～5・10・11区、2-2・6・7・9・10区）については、砂礫層で形成された微高地の標高が比較的高いものであることから、自然現象として微低地化するものと考えられる。したがって、今回の調査地周辺における微地形については、調査地北西部・北部及び東部に微高地が存在し、その微高地に囲まれた調査地中央部及び南西部は微低地であったと考えられる。また微低地部の様相として、調査地中央部については土層堆積状況から窪地状を呈する湿潤な土壌であったことが推察されるものの、調査地南西部については東から西に緩やかに傾斜する傾斜地であることから、比較的安定した土壌であった可能性がある。

さて、ここまで調査地周辺の微地形について述べてきたが、以下では上述した微地形の様相と今回の調査によって確認した堆積土及び遺構との関係について述べる。まず、微低地部の様相としては、窪地状の微低地とした調査地中央部の1-10区・2-2区では、第6層が黄灰色の粘土またはシルトとなる。これらの堆積土は水平堆積をしており、他の調査区と比較して粘性の強い土質であることから水田耕作土である可能性が高い。その他、微低地全体において確認した第5a・b層についても、水平堆積をする灰黄色系の粘質土であることから水田耕作土である可能性が高い。したがって、微低地の様相としては、比較的湿潤な土壌であったと考えられる調査地の中央部では古墳時代以降から、また微低地部全体としては遅くとも平安時代以降は水田耕作地として利用されていた可能性がある。このことは、今回の調査において微高地部やその縁辺部に設定した1-1・2区及び2-1・8区では、掘立柱建物や土坑など居住に関係する遺構を確認することができたものの、微低地部とした調査地中央部及び南西部の調査区では溝やピットなどが主体として検出される傾向であったことと矛盾しない。

次に微高地部の様相として、県センターの和歌山貝塚線の調査では、調査地北部において弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての竪穴住居及び、古墳時代後期末から飛鳥時代にかけての竪穴住居や掘立柱建物の他、中世の掘立柱建物や土坑墓などが検出されており、また調査地東部及び南部における一般国道24号バイパス関連の調査では、縄文時代晩期の土器棺墓や弥生時代中期の方形周溝墓、古墳時代から飛鳥時代にかけての竪穴住居や掘立柱建物など縄文時代から中世にかけての多数の遺構が検出されている。これらの県センターの調査成果のうち、今回の調査において微低地ではあるものの東から西に傾斜することから比較的安定した土壌であるとした調査地南部において、飛鳥時代の住居跡群が検出されている。よって、この一帯にも微高地を想定しておきたい。

今回の調査では、古墳時代から飛鳥時代の遺構検出面と考えられる第6a層上面以下において明確な遺構を確認することができなかったため、県センターの調査によって確認された弥生時代及び縄文時代の遺構分布や土層堆積状況からみた微地形の様相については言及することはできないものの、これまで



第11図 調査対象地周辺における古墳時代以降の微地形(文献①③参照)

の調査によって確認された古墳時代以降の遺構群は、今回の調査によって明らかとなった微地形と対応するものであり、調査地北西部・北部及び東部の微高地を中心にして居住にかかわる遺構及び、遺跡が形成されてきたことが分かる。その他、川辺遺跡の広がりとしては、2-8区において古墳時代の掘立柱建物を構成すると考えられる柱穴を多数確認することができた。このことは、調査地の西側にも古墳時代以降の居住域が展開する可能性を示す新たな成果と言えよう。また、調査地南部においても飛鳥時代の居住域が展開しているものと考えられる。

以上、調査結果について述べてきた。今回の調査は、小規模な調査区による確認調査ではあるものの、広大な範囲の情報を得ることができ、調査対象地の旧地形及び遺跡内部の土地利用のあり方について少しではあるものの検討材料を提示することができたものと考えられる。

【参考文献】

- ①『川辺遺跡発掘調査報告書』財団法人和歌山県文化財センター 1995年
- ②「川辺遺跡発掘調査」『和歌山市内遺跡発掘調査概報 ー平成13年度ー』和歌山市教育委員会 2003年
- ③『山口遺跡・川辺遺跡発掘調査報告書 ー県道和歌山貝塚線・県道粉河加太線道路改良事業に伴う発掘調査ー』財団法人和歌山県文化財センター 2005年

報告書抄録

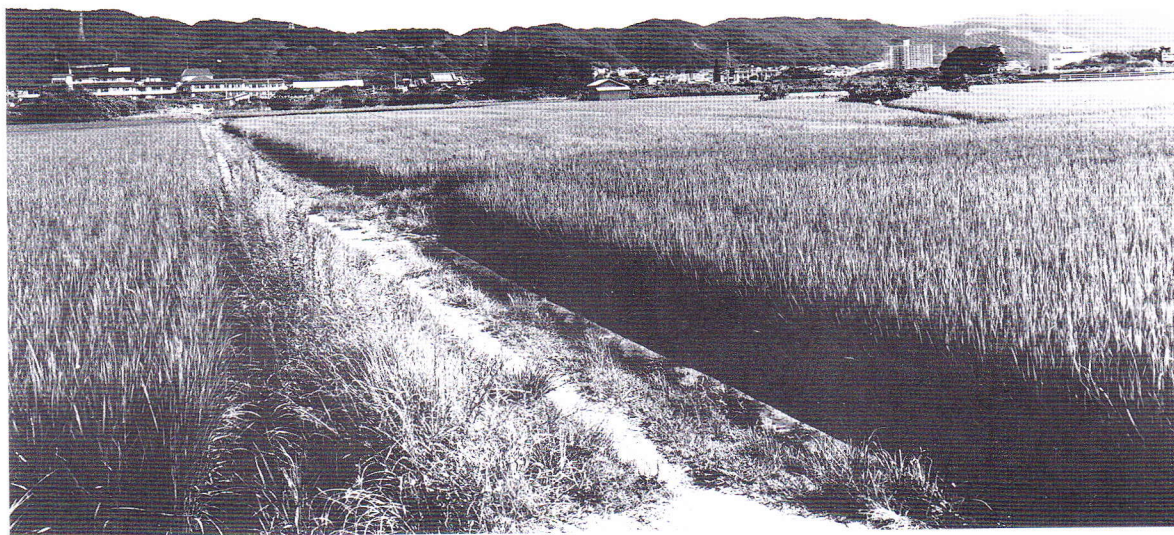
ふりがな	わかやましないいせきはつくつちょうさがいほう
書名	和歌山市内遺跡発掘調査概報
副書名	平成18年度
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	藤藪勝則
編集機関	1) 和歌山市教育委員会 2) 財団法人和歌山市都市整備公社
所在地	1) ☎640-8511 和歌山県和歌山市七番丁23 TEL 073-432-0001 2) ☎640-8146 和歌山県和歌山市一番丁3 TEL 073-435-1129
発行年月日	西暦2008年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かなべいせき 川辺遺跡	わかやまけん 和歌山県	3020150	145	34°	135°	20060815 ～ 20060921	175.5	大規模 開発に伴う 確認調査
	わかやまし 和歌山市			15′	16′	20061114 ～ 20061227	132.8	
	さと・かなべ・ふじた 里・川辺・藤田			30″	05″			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
川辺遺跡	集落跡	古墳時代 飛鳥時代 平安時代	溝・土坑・ピット・噴砂	土師器・須恵器・瓦器・ 中世土師器・中世陶器・ 輸入磁器		調査対象地における微地 形と集落域の西側への広 がりを確認。旧座標。		
要 約	今回の調査は、グリットによる確認調査ではあるものの、川辺遺跡の西半部において古墳時代から鎌倉時代の遺構を検出し、また遺構分布や土層堆積状況からみた調査対象地における古墳時代以降の微地形について検討材料を提示することができた。							

図 版



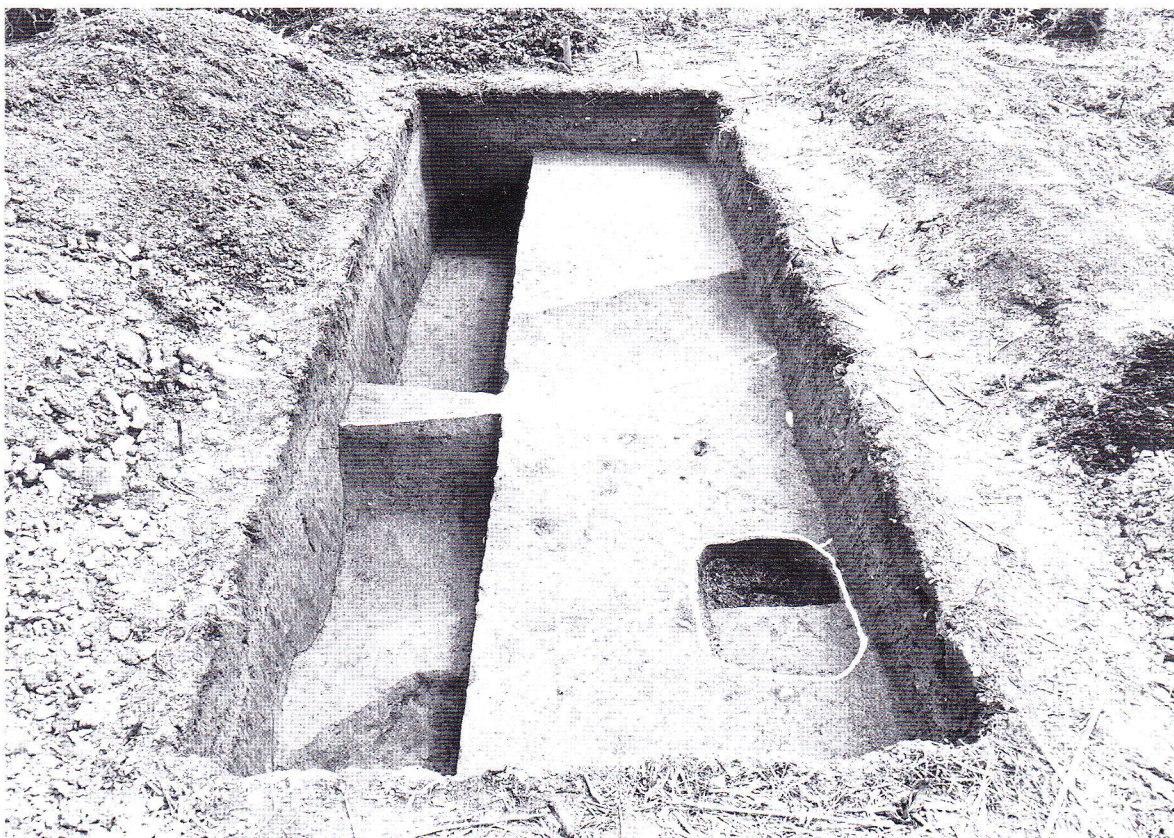
第2次確認調査 調査前の状況(北東から)



第2次確認調査 調査前の状況(南西から)



第3次確認調査 調査前の状況(北東から)



1-1区 全景(北から)



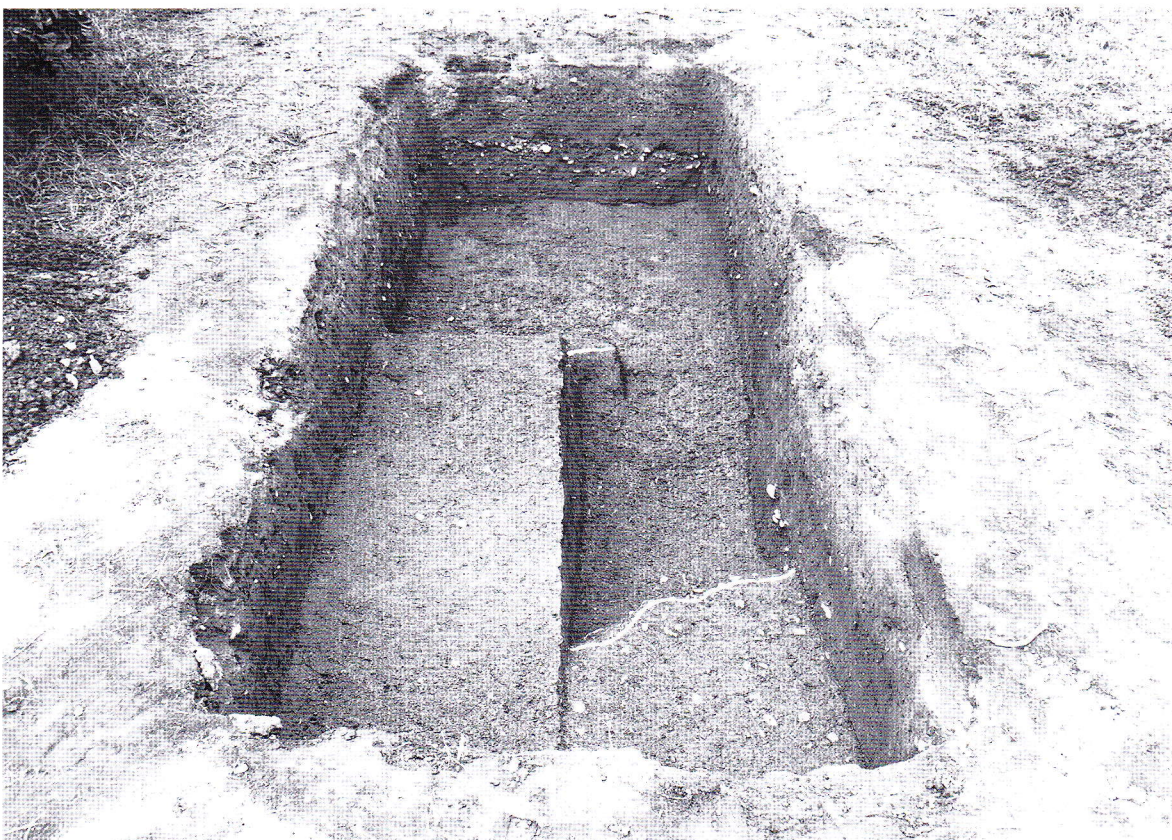
1-1区 SK-3土層堆積状況(南から)



1-1区 SD-3・4・5土層堆積状況(西から)



1-2区 全景(北から)



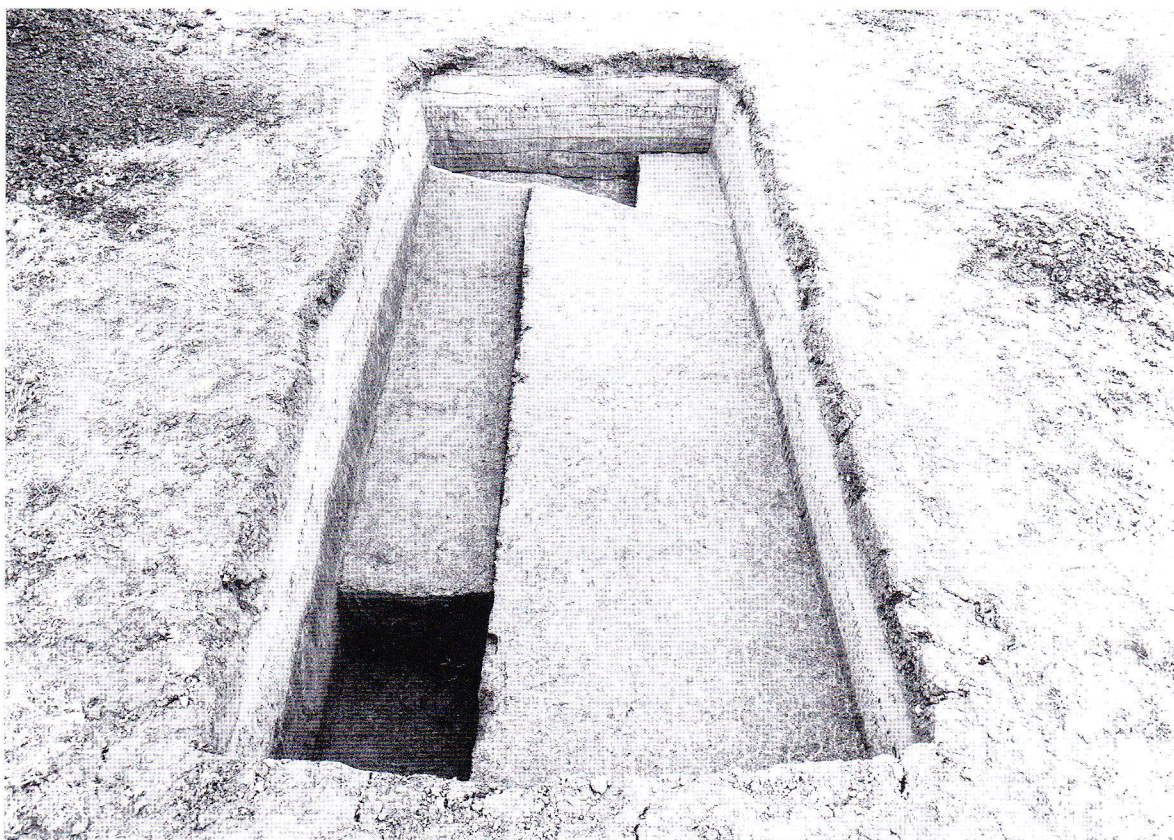
1-13区 全景(東から)



1-13区 SD-2土層堆積状況(北から)



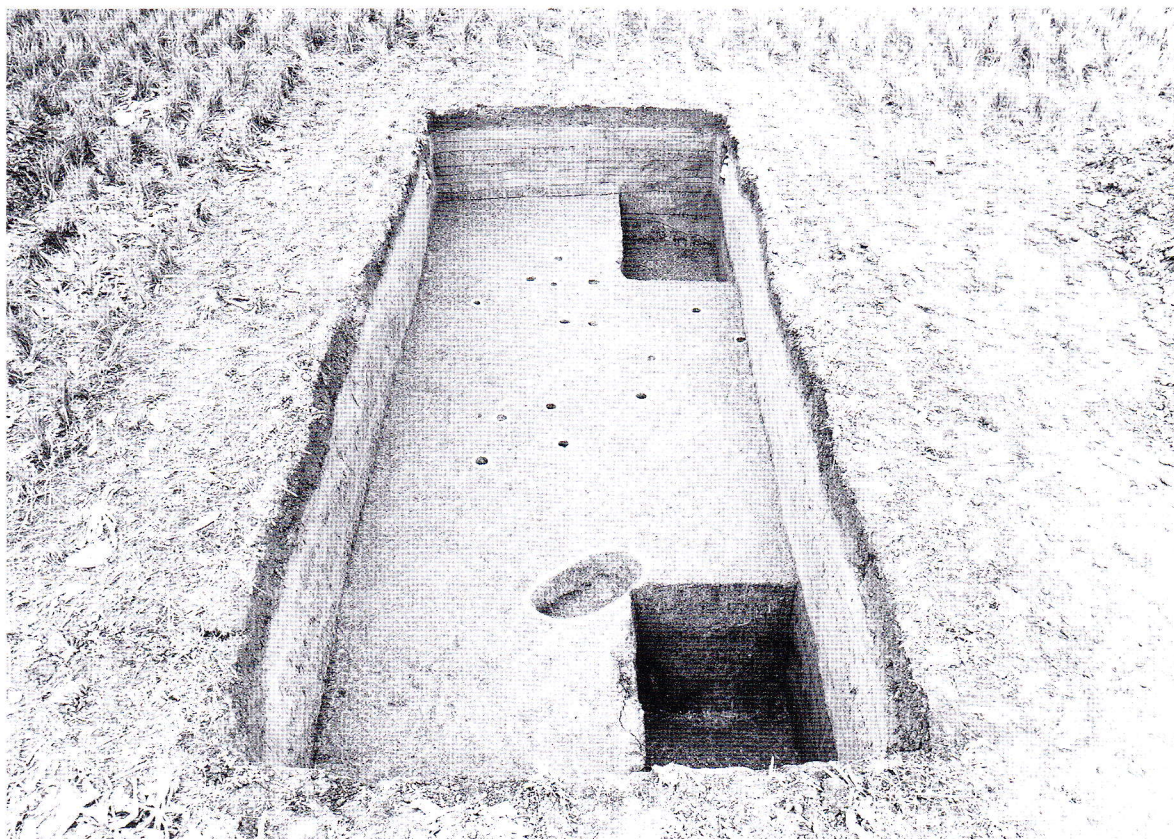
2-1区 全景(北から)



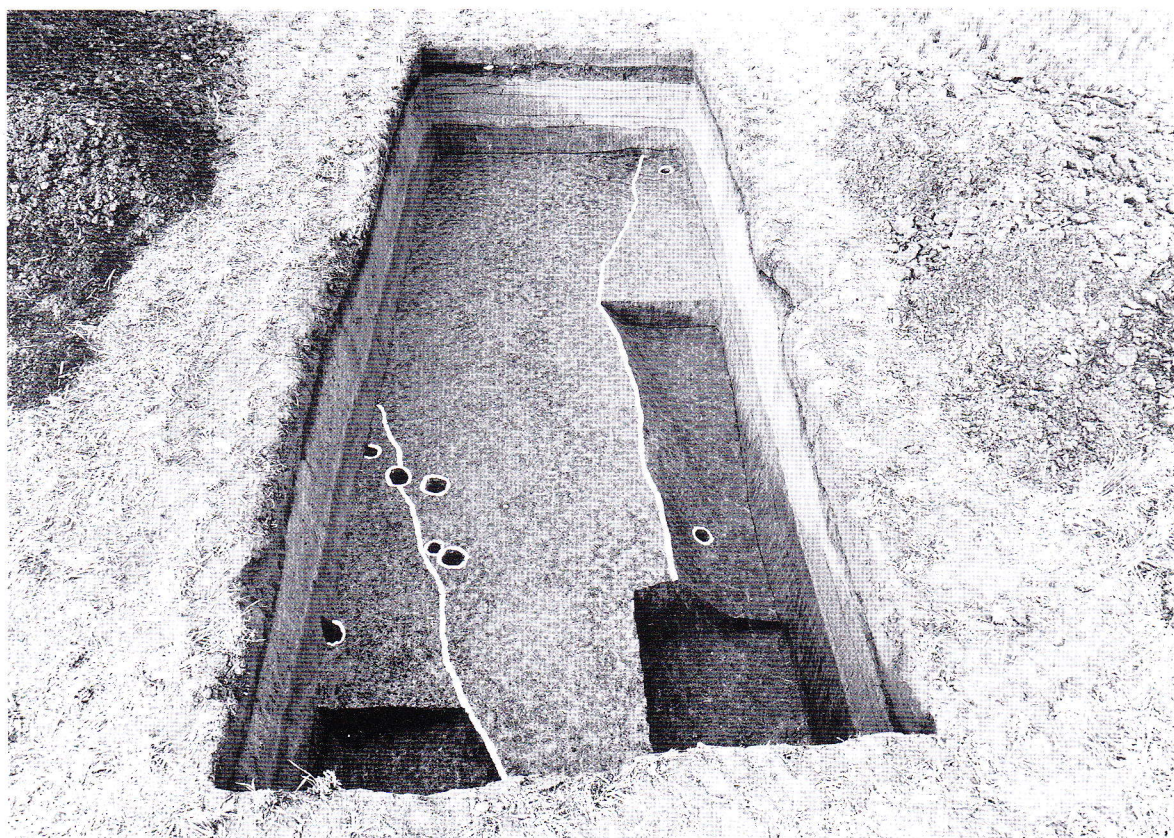
2-3区 全景(西から)



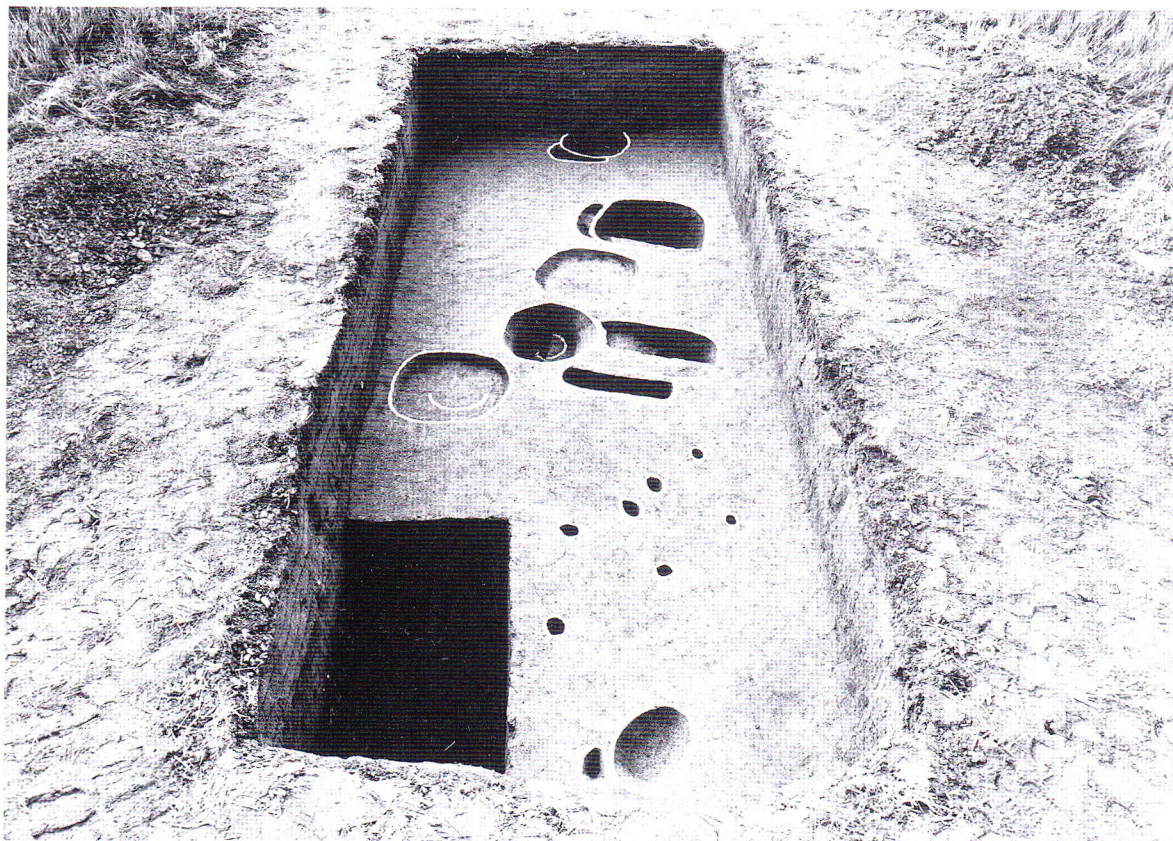
2-3区 SD-1(北東から)



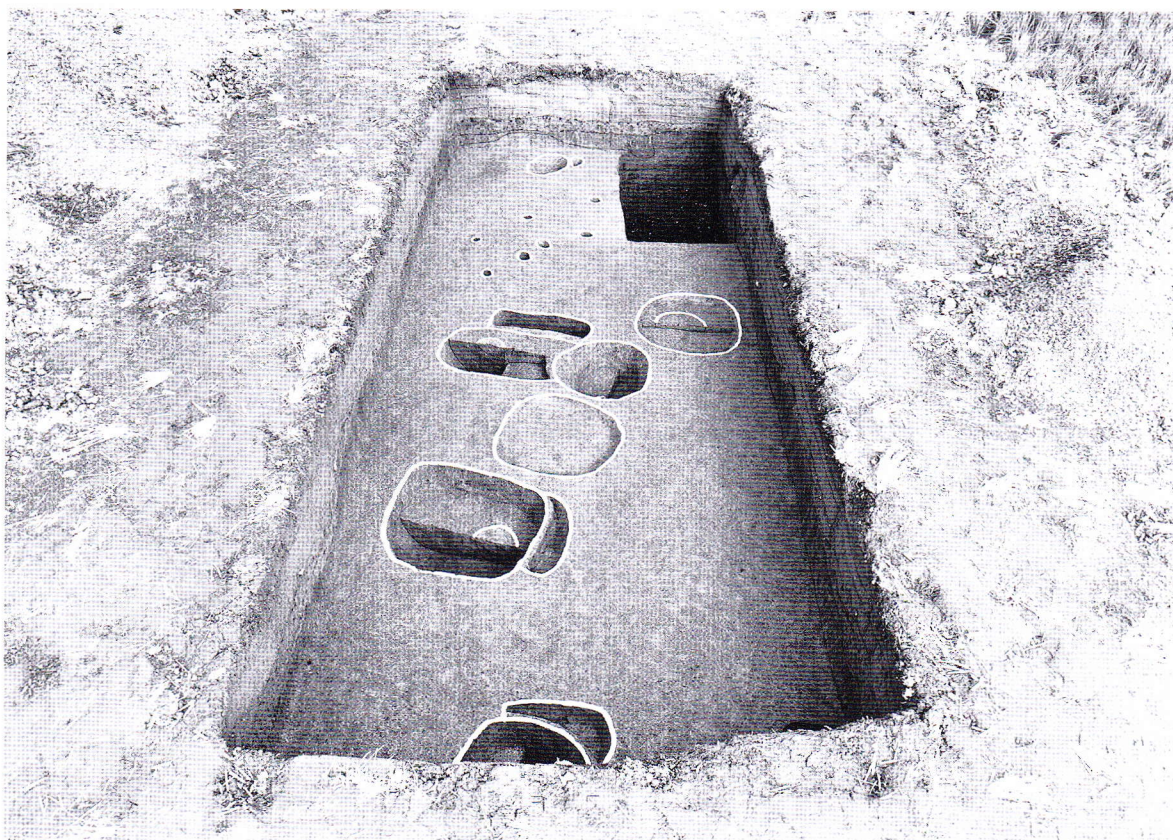
2-6区 全景(南から)



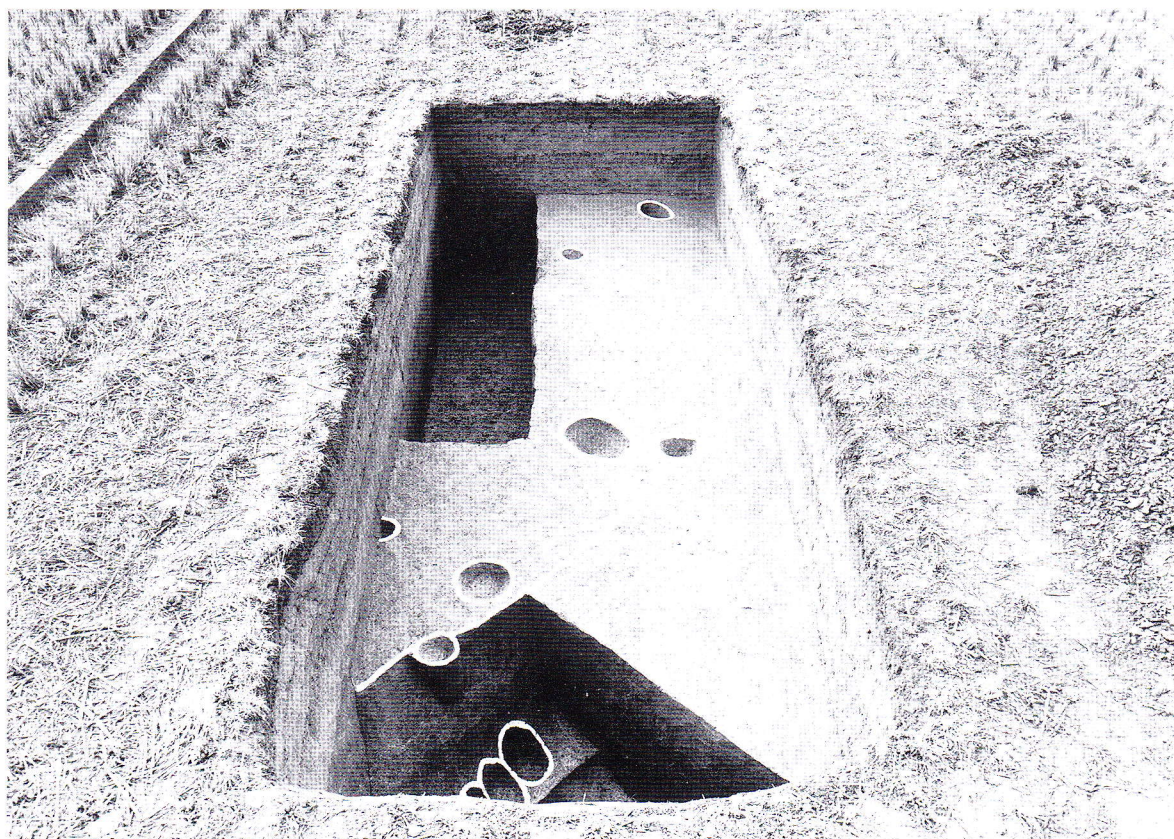
2-7区 全景(南から)



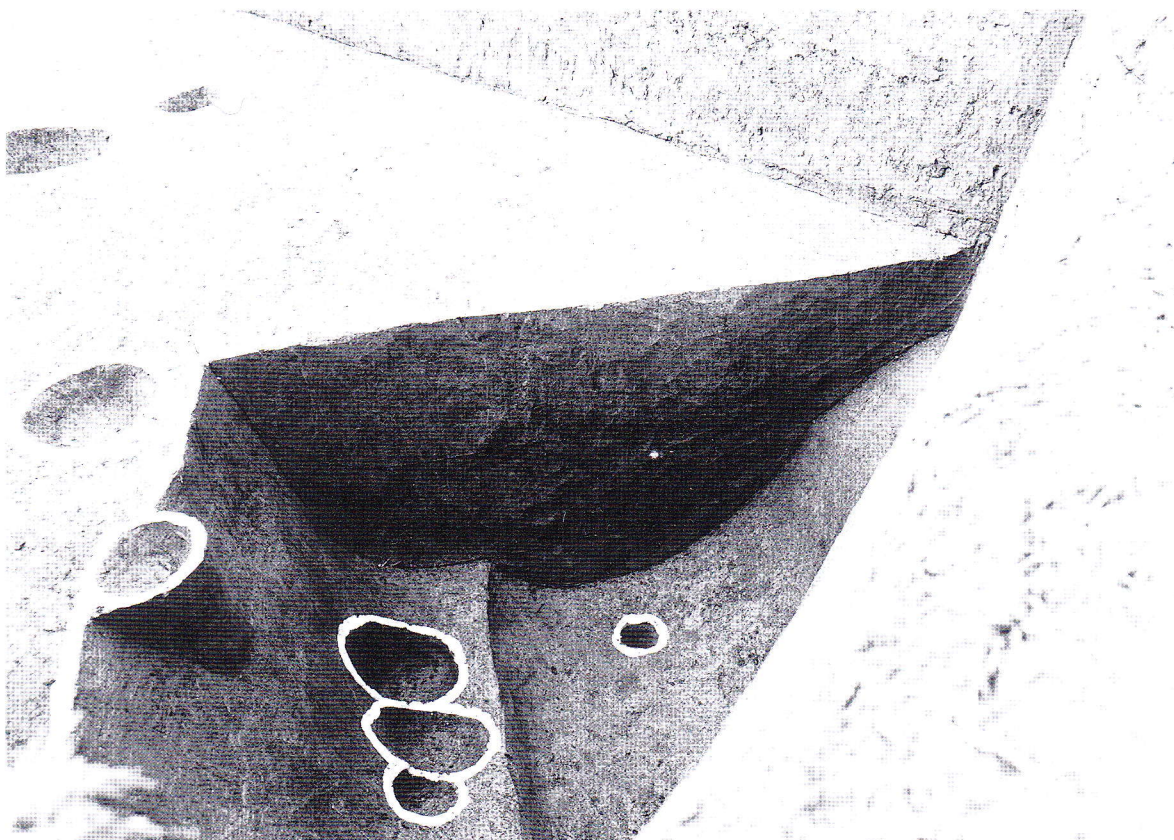
2-8区 全景(北から)



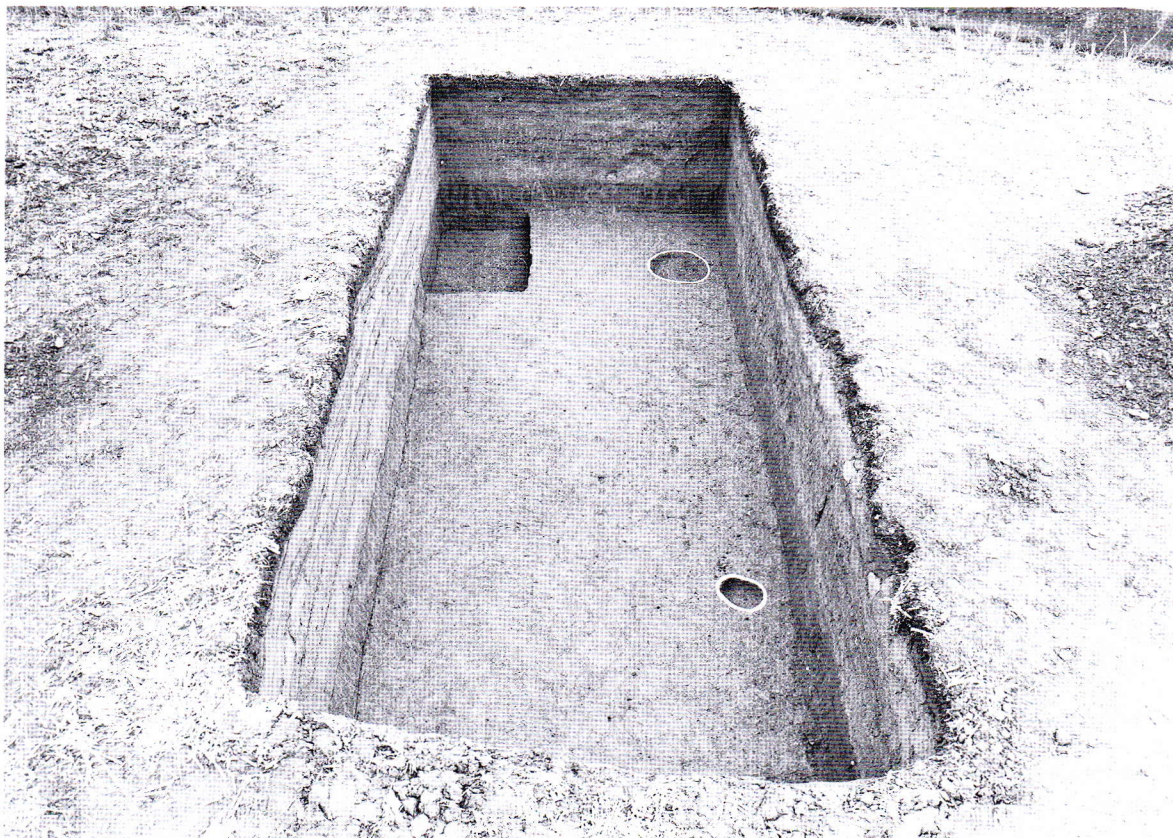
2-8区 全景(南から)



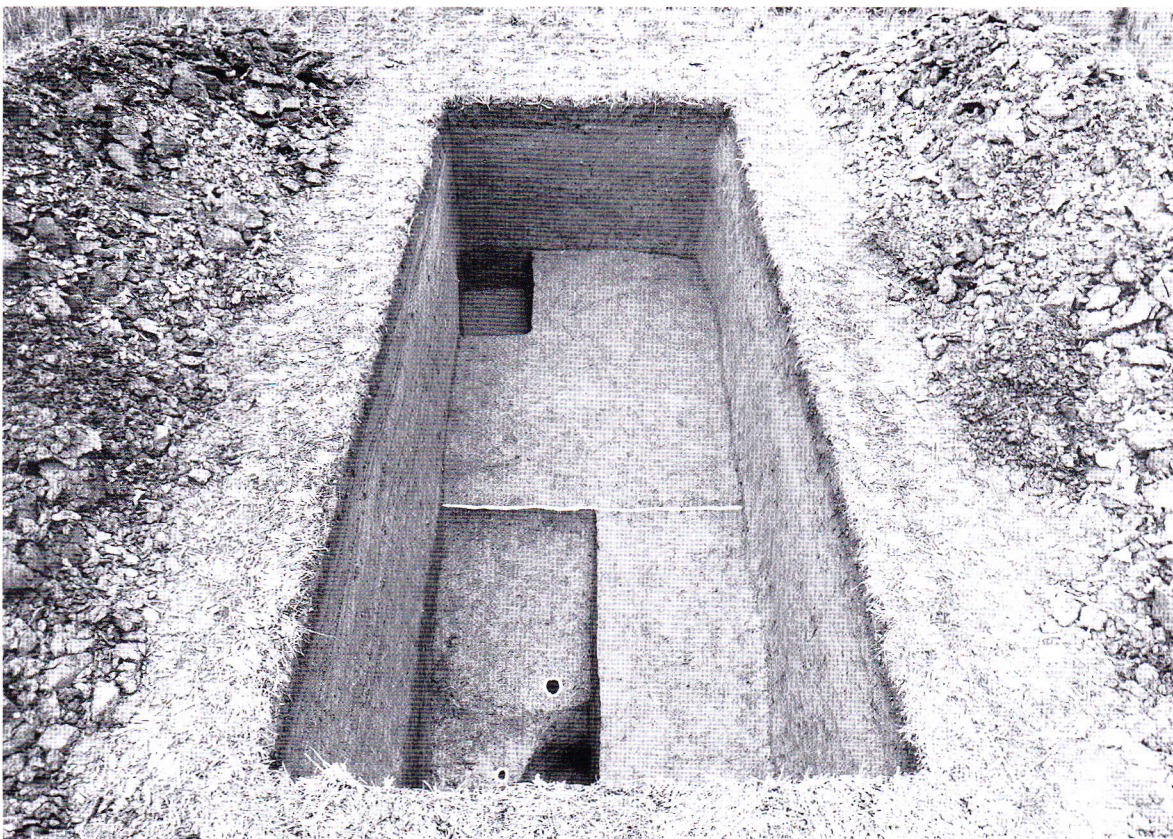
2-9区 全景(北から)



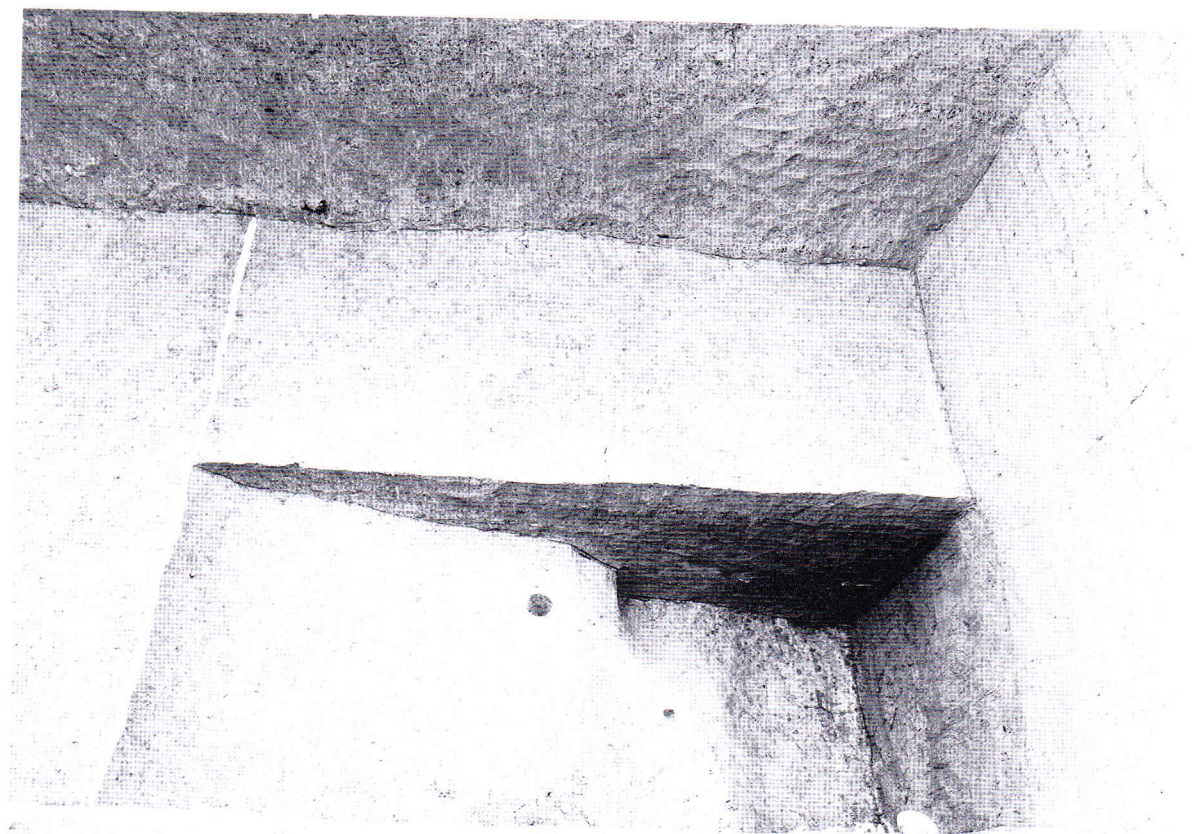
2-9区 SD-3土層堆積状況(北東から)



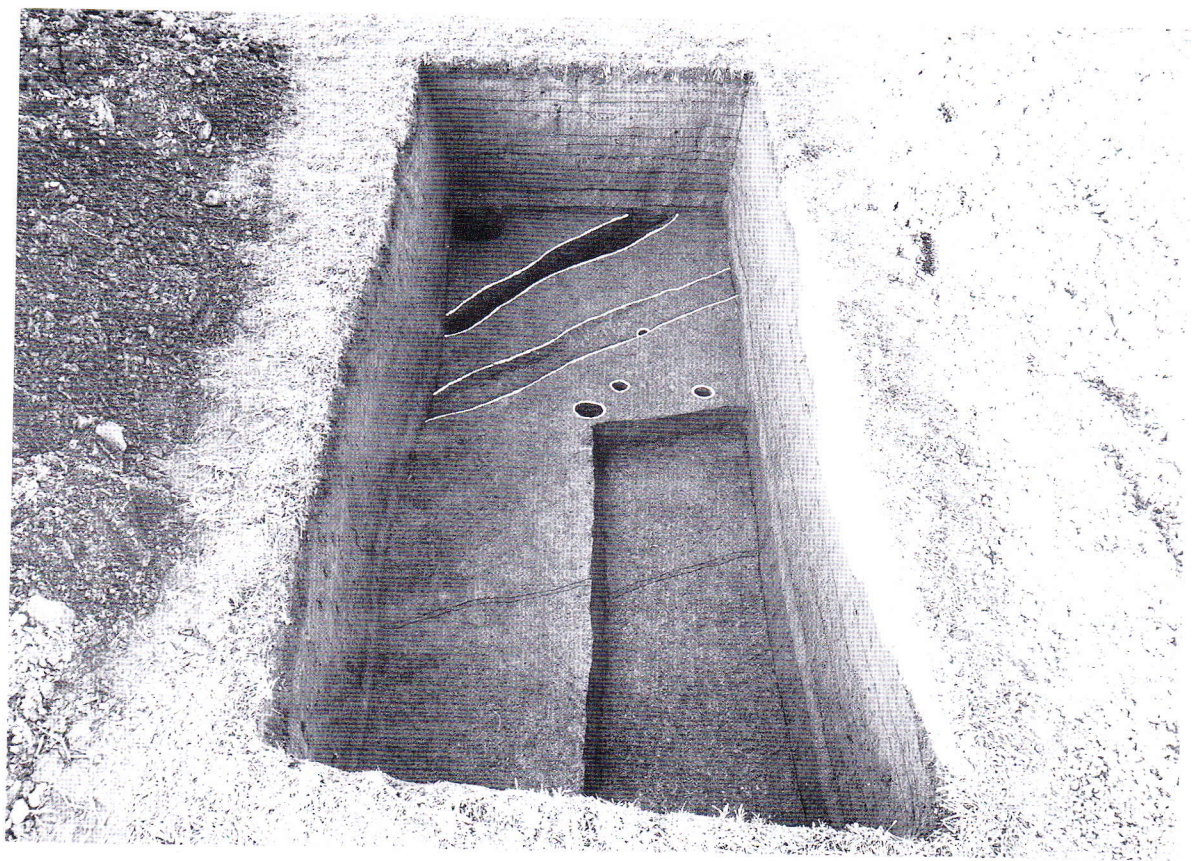
2-10区 全景(北から)



2-11区 全景(北から)



2-11区 SD-4 (東から)



2-12区 全景(南から)



1-1区 東壁土層堆積状況(西から)



1-2区 東壁土層堆積状況(西から)



1－4区 東壁土層堆積状況(西から)



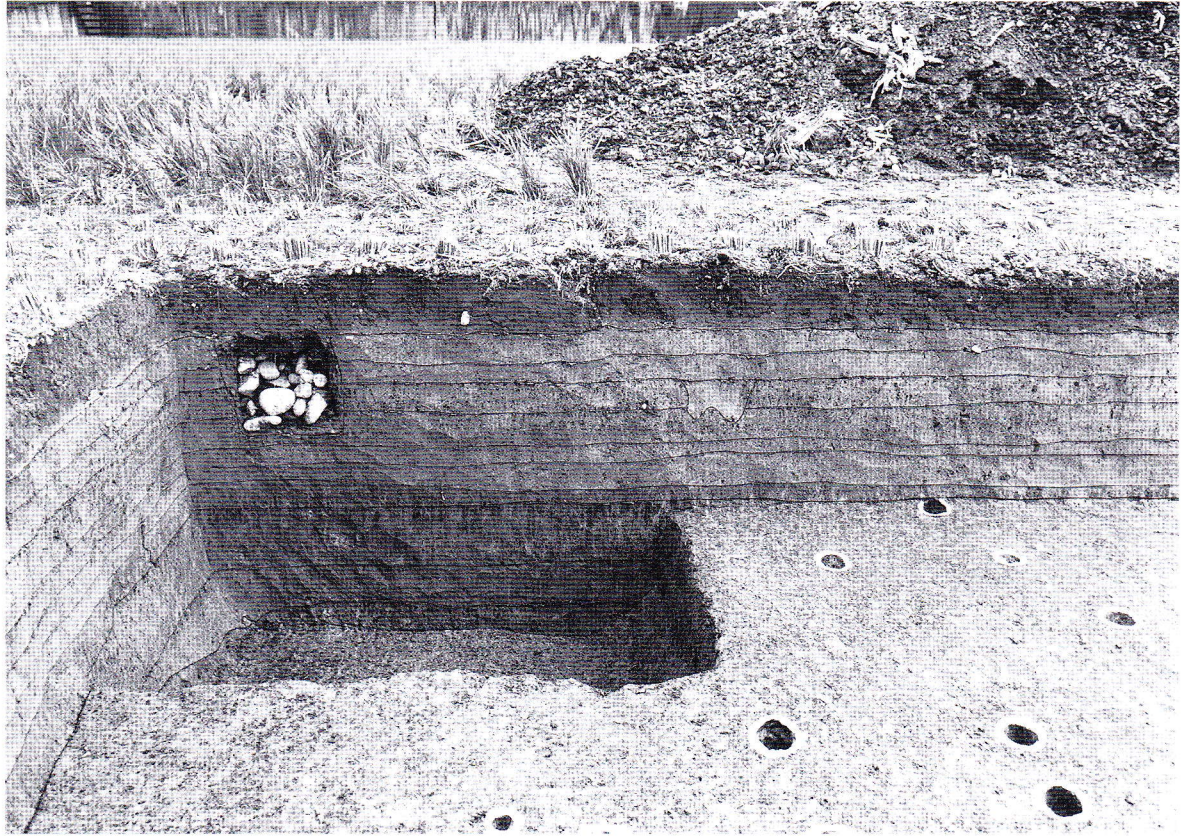
1－7区 北壁土層堆積状況(南から)



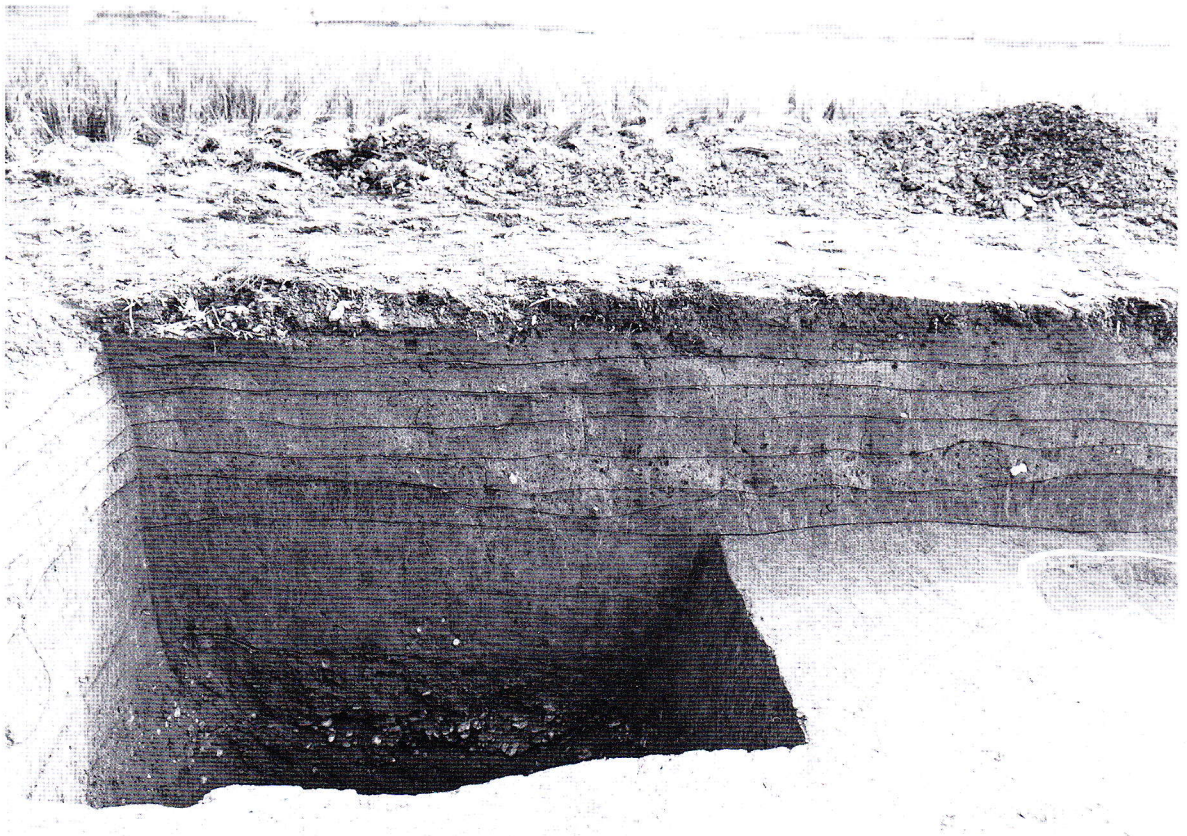
1－15区 東壁土層堆積状況(西から)



2－5区 北壁土層堆積状況(南から)



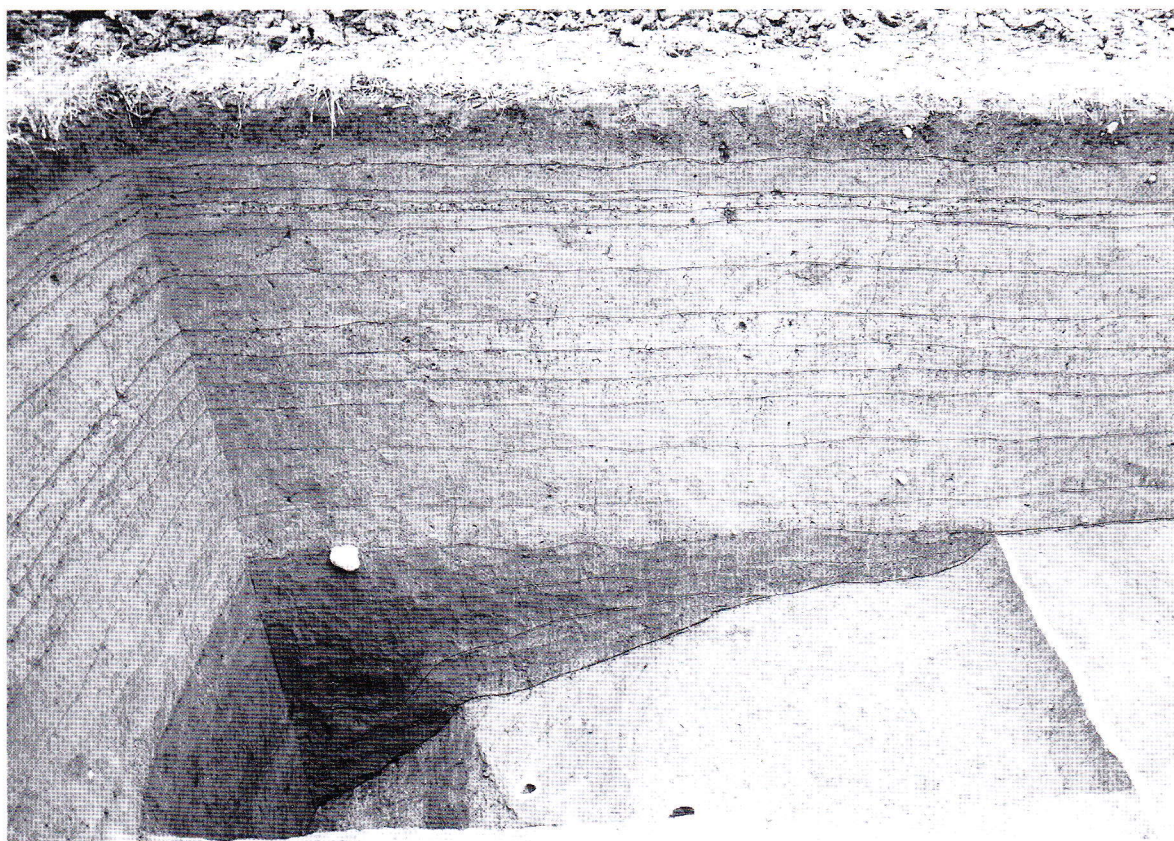
2-6区 東壁土層堆積状況(西から)



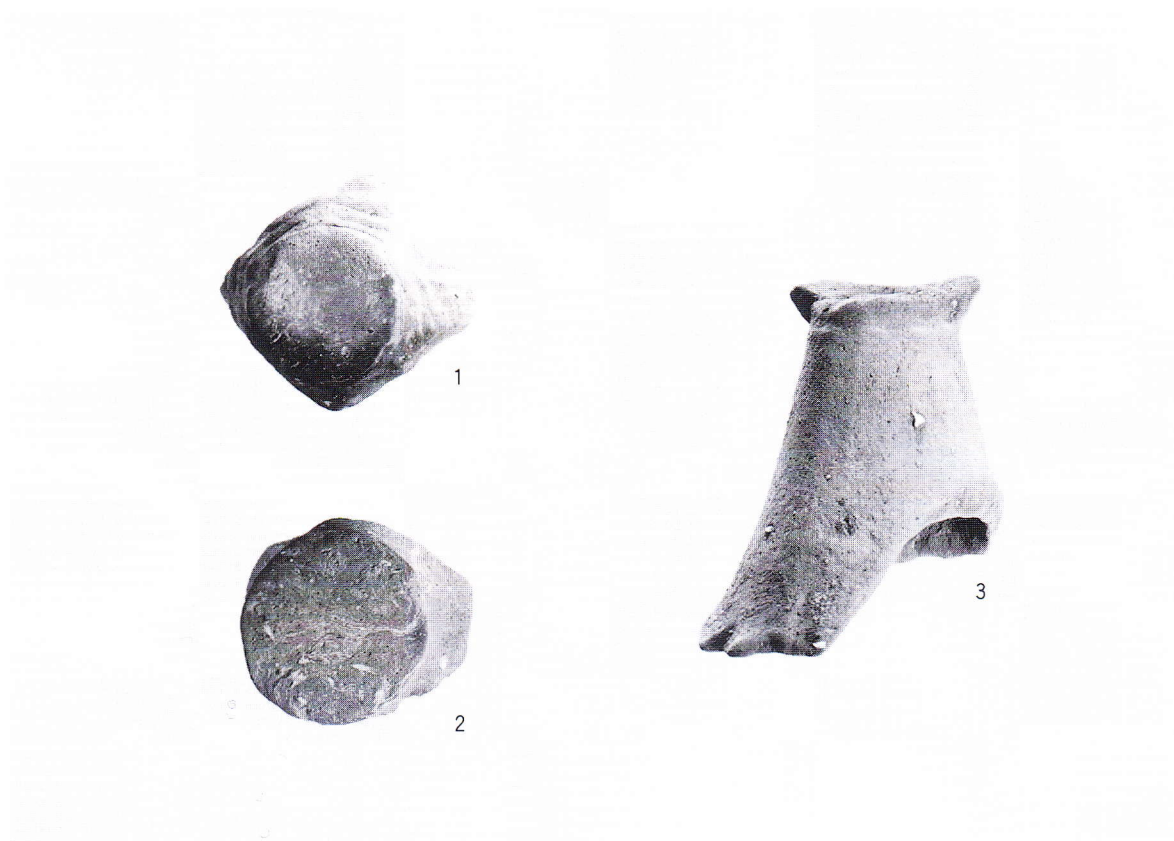
2-8区 東壁土層堆積状況(西から)



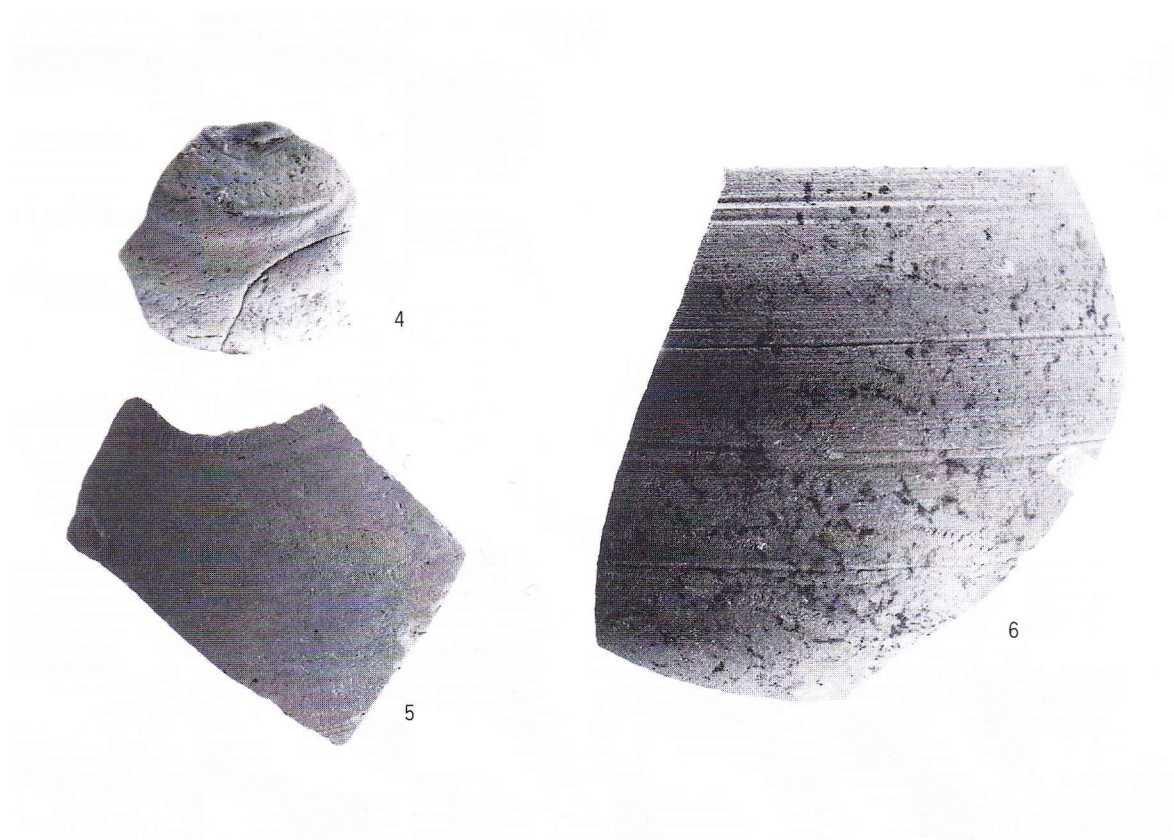
2-9区 東壁土層堆積状況(西から)



2-11区 東壁土層堆積状況(西から)



第2次確認調査 SD-4出土土器 土師器1・2甕 3高杯



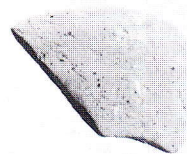
第2次確認調査 SD-13出土土器 須恵器4杯蓋 5壺 6鉢



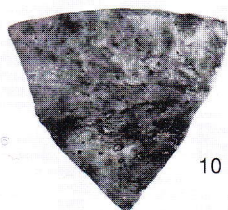
7



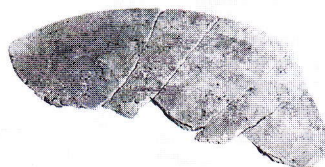
8



9



10

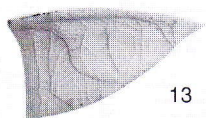


11



12

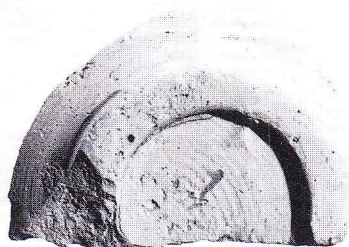
遺物包含層出土土器 土師器 7～9 皿 瓦器 10～12 碗



13



a



14

遺物包含層出土土器 中国製白磁 13 皿 瀬戸・美濃系陶器 14 灰釉碗 中国製青白磁 a 合子

平成20年3月31日発行

和歌山市内遺跡発掘調査概報告

— 平成18年度 —

編集 財団法人和歌山市都市整備公社
和歌山市西汀丁36

発行 和歌山市教育委員会
和歌山市七番丁23

印刷 株式会社 高木プリント

© 和歌山市教育委員会 2008